

2. 第1面(1)の調査

(1) 概要 (図版34 写真図版28)

概要

Ⅲ区第1面(1)では、調査区の北コーナー付近の一段高い部分を囲むように区画する水路である溝SD16と、その外側の低い部分一帯に鋤溝を検出している。SD16で囲まれた部分については鋤溝は無く、土地利用の違いを示すものと思われる。なお、この溝は第11図によれば、「明林寺」と「長尾」という小字の境界とも関連している。

なお、SD16については、Ⅳ区第1面においてまとめて報告することにする。

(2) 調査の結果

鋤溝

検出状況

土壌層Ⅰのレベルが高くなっているSD16より北側では検出できず、その地区以外全域で検出した。

形状・規模

大きく2方向からなり、互いにほぼ直交方向にある。各主軸方向は、N115°EとN40°Eである。両方向のものは平面的に重複することなく、互いに意識し合っていた、つまり同時に存在していたものと考えられる。各溝の規模に大差はないが、東西方向に近い鋤溝のほうが平均的に検出した長さが長く、最長で14.8mに及ぶ。両方向とも横断面はU字形をなし、検出面における幅は30～60cmを測り、最深部における検出面からの深さは10～15cmである。

埋没状況

灰黄色極細砂1層からなる。

出土遺物

まったく出土していない。

時期

鋤溝の方向をみると、SD16の方向とはほぼ一致する。したがって、SD16についても、鋤溝とはほぼ同時期に機能していた可能性が高い。そして、SD16上層の時期（後述）から判断して、中世後半～近世と判断される。



第61図 Ⅲ区第1面(1)

3. 第1面(2)の調査

(1) 概要 (図版35 写真図版29・30)

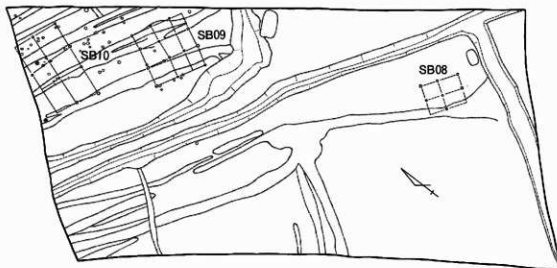
概要 Ⅲ区第1面(2)では、第1面(1)で検出された溝SD16で囲まれた部分では、高と掘立柱建物2棟、柱穴群などの遺構が検出されている。これらの遺構の方向はSD16に規制されているように見受けられる。この部分は第1面(1)ほどではないが、溝の外よりも一段高くなっている。SD16の南には、少し間隔をおいてSD16と平行して調査区を斜めに横切って流れるSD21とそれに直交するSD22が流れている。これらも調査区内を大きく区画する溝である。このSD21・SD22に囲まれた範囲には、基本的にこの区画に沿った方向に流れるSD23～SD34までの溝と、区画に沿って建てられた掘立柱建物1棟を検出している。



第62図 Ⅲ区第1面(2)

(2) 調査の結果

1. 掘立柱建物跡



第63図 III区第1面(2) 掘立柱建物跡

SB08 (図版36)

検出状況 調査区東部で検出した(第63図)。SD22の西、SD21の南に位置する。SD23と切り合い関係にあり、当建物跡が切っている。

形状・規模 N50°Wに棟軸方向をとる、梁行2間、桁行2間の掘立柱建物であるが、南西梁行方向については、中央の1穴のみしか検出できなかった。北東桁行方向で3.40mを測り、梁行方向については、各桁行中央の柱どうしを結ぶ距離で2.60mを測る。平均の柱穴間距離は、梁行方向で1.30m、桁行方向で1.70mである。復元される建物の面積は8.84㎡である。

柱穴 掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方の径8~11cm、検出面からの深さ15~32cmを測る。柱痕については、検出できなかった。

出土遺物 全く出土していない。

時期 黄灰色の埴土、SD23を切ることから、中世後期以降と考えられる。

SB09 (図版36)

検出状況 調査区北東部で検出した(第63図)。畚1と切り合い関係にあるが、直接その前後関係を明確にすることはできなかった。

形状・規模 N30°Eに棟軸方向をとる、梁行3間、桁行3間の掘立柱建物であるが、北東隅と南西梁行の南東隅から2穴目の柱穴を欠く。北西桁行方向で4.85m、南西梁行方向で4.64mを測る。柱穴間の平均距離は、北西桁行で1.62m、南西梁行方向で1.54mを測る。建物の面積は22.5㎡である。

柱穴 掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方の径9~16cm、柱痕径6~13cm、検出面からの深さ22~49cmを測る。

出土遺物 須恵器と土師器が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。須恵器では

第4節 III区の調査

碗・壺・捏鉢が、土師器では小皿・碗・鍋・羽釜の各器種が出土している。このなかで、土師器の碗は、底部が平高台をなすもので、回転糸切りにより切り離されている。

時期 柱穴内出土土器の示す時期、棟軸方向から当建物跡とはほぼ同時期と考えられるSB10の示す時期から判断して、12世紀前半と考えられる。

SB10 (図版37)

検出状況 調査区北隅で検出した(第63図)。SB09同様、畝1と切り合い関係にあるが、直接その前後関係を明確にすることはできなかった。

形状・規模 N20°Eに棟軸方向をとる、梁行2間、桁行3間の掘立柱建物であるが、西桁行方向については、1穴を検出したにとどまる。IV区第2面検出のSB12と同一の建物である可能性も考えられたが、柱穴間距離が調査区境を挟んで大きく異なることから、別の建物と判断した。

東桁行方向で7.70mを測り、梁行方向は北側から2列目で4.15mを測る。柱穴間の平均距離は、東桁行方向で2.56m、梁行方向で2.07mを測る。建物の面積は31.95㎡である。

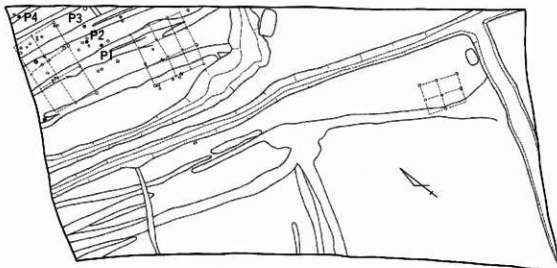
柱穴 掘り方の平面形は円形を呈する。掘り方の径は11～15cm、柱直径は8～12cm、検出面からの深さは18～33cmを測る。

出土遺物 須恵器の碗、土師器の碗・小皿・鍋の各器種が出土している。このなかで図化できたのは、柱穴から出土した土師器の小皿の小片(266)1点のみである。

時期 柱穴出土土器から判断して、12世紀前半と考えられる。

II. 柱穴

建物に復元されなかった柱穴のなかで、遺物の出土している柱穴について報告する。



第64図 III区第1面(2) 柱穴

P1 (図版37 写真図版119)

- 検出状況** 調査区北側、畠1の中央部にあたり、P2の南東1.3mに位置する(第64図)。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形は30cm×26cmとほぼ円形に近い。検出面からの深さは12cmである。
- 出土状況** 柱穴底部に土器片が折り重なるように出土している。
- 出土遺物** 須恵器の甕(267)1点が出土している。
- 時期** 出土土器から、12世紀後半から13世紀前半にかけてと考えられる。

P2 (図版37)

- 検出状況** 調査区北側、畠1の中央部にあたり、P1の北西1.3m、P3の南西1.3mに位置する(第64図)。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形は30cm×27cmとほぼ円形に近く、P1とほぼ同規模である。
- 出土状況** 柱穴底部に土器片が折り重なるように出土している。
- 出土遺物** 須恵器の控鉢(268)1点が出土している。わずかの残存であるが、ほぼ完形に復元できる。他の控鉢と比較して小型である。内面は、使用により滑らかである。
- 時期** 控鉢の形態から、12世紀前半と考えられる。

P3 (図版37・38 写真図版119)

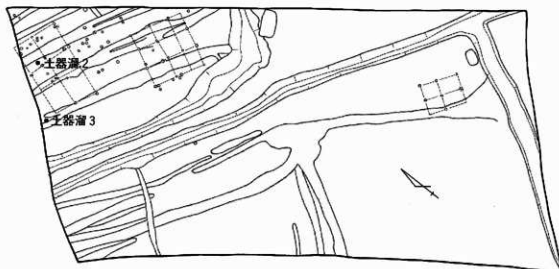
- 検出状況** 調査区北側、畠1の中央部にあたり、P2の北東1.3mに位置する(第64図)。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形は円形を呈し、規模もP1・P2とほぼ同規模である。
- 出土状況** 柱穴底部に土器片が折り重なるように出土している。
- 出土遺物** 土師器の甕と坏(270)、須恵器の碗底部(271)各1個体が出土している。
- 甕** 269の1個体が出土している。底部を欠くがほぼ完形に復元でき、底部は類例から判断して丸底に復元できる。外面は叩きにより整形されており、この後口頸部を横ナデ調整により仕上げられている。外面の叩き痕が残存する範囲に煤の付着が認められる。
- 時期** 出土土器から判断して12世紀前半と考えられる。

P4 (図版38 写真図版119)

- 検出状況** 調査区北隅に位置し、畠1と重複する(第64図)。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形は円形を呈し、規模もP1・P2とほぼ同規模である。
- 出土状況** 柱穴底部に土器片が折り重なるように出土している。
- 出土遺物** 土師器の甕(272)1個体が出土している。体部はハケ調整により仕上げられ、その後体部上半部についてはナデ調整により仕上げられている。内面はナデ調整により仕上げられているが、頸部付近に横方向の板ナデ調整痕がわずかに認められる。外面には煤の付着は認められないが、全体的に二次焼成を受けている。
- 時期** 出土土器から12世紀前半と考えられる。

Ⅲ. 土器溜

明確に遺構とは判断できないが、数点の土器の出土地点を土器溜まりとして報告する。



第65図 Ⅲ区第1面(2) 土器溜

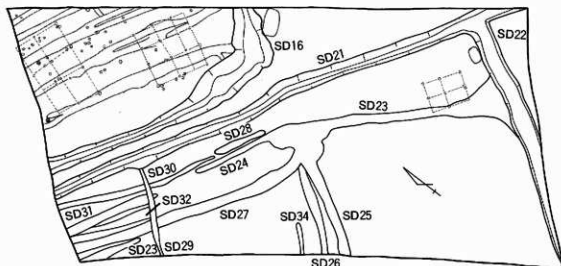
土器溜2 (図版38 写真図版31・119)

- 検出状況 調査区北隅に位置し、土器溜3の北東約5mにあたる(第65図)。島1と重複する。
- 出土状況 11個体の土器器小皿が20cm×20cmの範囲に集中して出土した。多くの個体は完形もしくは完形に近い状態での出土である。小皿の集中部の下面はわずかに窪んでいるが、遺構と判断するまでには至らなかった。
- 出土遺物 土器器小皿が11個体出土している。ほぼ同じ法量からなり、口径7.3~8.2cmに集中する。底部の切り離し方法が観察できる個体のうち、281のヘラ切りを除いては全て回転糸切りにより切り離されている。
- 時期 出土土器から判断して、11世紀末~12世紀前半と考えられる。

土器溜3 (図版38 写真図版31・120)

- 検出状況 調査区北西端に位置し、土器溜2の南西約5mにあたる(第65図)。土器溜2と同じく、島1と重複する。
- 出土状況 土器器の坏と小皿が25cm×25cmの範囲に集中して出土した。この土器の集中部の下面は、土器溜1同様わずかに窪んでいるが、遺構として判断するまでには至らなかった。また、この集中部には炭化材が多く共伴していた。
- 出土遺物 土器器の坏1個体(284)と小皿2個体(285・286)が出土している。
- 坏 土器自体の残存状況は良好とはいえないが、体部~口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられており、回転糸により整形された土器である。ただし、底部の切り離し方法については、磨減が著しく観察できなかった。
- 小皿 2個体出土している。285は口径9.8cmを測り、中皿に近いタイプである。底部はヘラ切りにより切り離されている。286は底部を回転糸切りにより切り離されている。
- 時期 出土土器から判断して、11世紀末~12世紀前半と考えられる。

IV. 溝



第66図 Ⅲ区第1面(2) 溝

SD 2 1 (図版39-43 写真図版32・120-122・179)

検出状況 Ⅲ区全体を斜めに横切るような形で検出され(第66図)、Ⅲ区南東隅付近でSD22が直角に分岐する。SD29を切っている。

形状・規模 溝の方向は西北西から東南東である。長さは41.1mが検出された。幅は検出面で1.71m～85cm、平均幅1.21m、清底で1.14m～32cmを測る。断面は逆台形、ないし部分的には片側だけ途中に段をもつ逆台形を呈し、検出面からの深さは51cmである。清底の標高は西北西端で6.32m、南東端で6.26mを測り、その方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況 埋土は4ないし5層に分けられ、上層から灰黄褐色極細砂、灰黄褐色シルト混じり極細砂、にぶい黄褐色シルト混じり極細砂、暗灰黄色シルト、灰オリーブシルトである。2層目以下には炭や土器が含まれ、特に底付近で流れに沿うようになりかなりまとまった量の遺物が出土している。

出土遺物 土器と瓦・石器が出土している。

土 器 土師器と須恵器が出土している。

土師器 小皿・大皿・坏・鍋・羽釜の各器種が出土している。

小 皿 292を除いては、底部は回転糸切りにより切り離されている。292についても、器表面の遺存状況がよくないため観察できないが、その形態から回転糸切りにより切り離されていたものと考えられる。口縁部はいずれも横ナデ調整により仕上げられている。

大 皿 固化できた2個体とも、口縁部は2段の横ナデ調整により仕上げられ、底部はユビナデ・指抑えにより仕上げられている。

坏 297の1個体である。口縁部は横ナデ調整により仕上げられている。底部形態に、平底の痕跡が認められる。

鍋 298-300の3個体であるが、明確に鍋と判断できるのは300の1個体のみである。299と298は、口縁端部を外方につまみ出さず、口縁部一体部内外面をハケ調整により仕上げられている点で300と大きく異なる。壺と鍋の中間形態をなす土器と考えられる。

第4節 Ⅲ区の調査

- 羽 蓋 土師器のなかでは量的に最も多く出土している。いずれも、内灣しかつ内傾する口縁部に鈎を貼り付けるタイプで、口径に若干のバリエーションが認められる。
- 須恵器 碗・小皿・控鉢・壺他の各器種が出土している。
- 碗 須恵器のなかで量的に最も多く出土しているが、口縁部および底部の形態から2タイプに分類できる。明確な平底を有し内面見込み部が一段落ち込み口縁部を薄く仕上げるもの(329~335)と、底部から体部への変換が曖昧で口縁部をわずかに肥厚させるもの(309~327)の2タイプである。底部の切り離しは、両タイプとも回転糸切りによっている。
- 小 皿 図化できたのは336の1個体である。碗同様、底部は回転糸切りにより切り離されている。
- 控 鉢 図化できたのはいずれも口縁部を上方につまみ上げるタイプである。
- 壺 志方古窯跡群産の壺と考えられ、口縁部のみ残存する。
- 他 図化できなかったが、叩き目を有する甕の体部片が出土している。
- 瓦 345は軒平瓦である。典型的な包み込み技法で作られた播磨地方特有の瓦であり、同様の文様は三木市平井窯跡群にみられる。
- 346は平瓦である。両面の調整はナデ、端部は横方向にヘラ削りしている。
- 石 器 S 55は凝灰質砂岩製の砥石である。両端、裏面が欠損しており、元の形は不明であるが、現存している部分は長細い三角形の形状をしている。長さ11.05cm、幅6.8cm、厚さ2.85cm、重さ266.4g。
- 時 期 時期を特定する上で基準となるのが、須恵器の碗である。前述したように、須恵器の碗には2タイプが認められ、それぞれ11世紀後半と12世紀前半と考えられる。よって、11世紀後半には掘削され、12世紀前半には埋没していったものと考えられる。
- SD 2 2 (図版43 写真図版122)
- 検出状況 Ⅲ区南東辺近くでSD21に対して直交方向に分岐し、調査区を横断する形で検出された(第66図)。
- 形状・規模 溝の方向は南東から北西方向である。長さは16.1mが確認された。幅は検出面で1.94~1.54m、溝底で1.50m~50cmを測り、比較的幅が一定している。断面は幅広のU字形ともいべき形状で、検出面からの深さは69cmである。溝底の標高は南東端は6.52m、北西端は6.08mであり、その方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況 3層からなり、上層から灰黄褐色シルト質極細砂、灰黄褐色極細砂~細砂、黒褐色シルトであり、2・3層に遺物を含んでいる。
- 出土遺物 土師器と須恵器および白磁が出土している。
- 土師器 図化できなかったが、鍋の体部~口縁部片が出土している。
- 須恵器 控鉢・碗・甕の各器種が出土している。碗(350)は、明確な平高台を有するもので、底部は回転糸切りにより切り離されている。
- 白 磁 2個体図化したが、いずれも森田分類でいうⅣ類碗の口縁部である。
- 時 期 出土土器、特に須恵器の碗・控鉢の形態から判断して、11世紀後半と考えられる。

SD23 (図版39・43 写真図版122)

- 検出状況** III区の東南半分を縦断する形で検出された (第66図)。SD22に切れ、SD24・SD25・SD27につながっている。
- 形状・規模** 溝の方向は南東から北西で、検出した長さは18mである。幅は検出面で81~68cm、溝底で55~28cmを測る。断面は浅いU字形を呈し、検出面からの深さは19cmである。溝底の標高は南東端で6.58m、北西端で6.38mを測り、その方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況** 黄灰色シルト1層からなる。
- 出土遺物** 土師器・須恵器の各器種が出土している。
- 土師器** 大皿 (353) が1個体出土している。口縁部を2段のナデ調整により仕上げ、底部を指抑えとナデ調整により仕上げている。この他図化できなかったが、底部を回転糸切りにより切り離す坯の底部片が出土している。
- 須恵器** 碗と壺が出土している。碗は底部のみの残存であるが、明確な平高台をなすものである。壺は瓶の底部片で、底部は回転糸切りにより仕上げられている。
- 時期** 出土土器から判断して、11世紀後半と考えられる。

SD24

- 検出状況** 調査区のはほぼ中央部に位置する (第66図)。調査区中央部で、SD23・SD25・SD27・SD24が合流している。この合流部の切り合い関係は明確にできなかったが、当溝はSD23と一体のものである可能性が高い。SD28の南西側に接するが、当溝と明確に切り合う遺構は認められない。
- 形状・規模** 北西から南東方向にはほぼ直線的な溝で、検出した長さは9.2mである。横断面は緩やかなU字形をなし、検出面における幅は平均で52cmを測り、最深部における検出面からの深さは20cmである。底部の標高は北西端で6.38m、南東端で6.27mである。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** 埴土がSD23・SD25・SD27と同じであることから、これらとはほぼ同じ時期、11世紀後半を中心とした時期と考えられる。

SD25

- 検出状況** III区中央部で検出された (第66図)。SD23・SD27に繋がり、SD26を切っている。
- 形状・規模** 溝の方向は南西から北東である。長さは9.54mが検出された。幅は検出面で1.15m~72cm、溝底で86cm~45cmを測る。断面は平底に近い浅いU字形を呈し、検出面からの深さは28cmである。溝底の標高は南西端で6.47m、北東端で6.41mであり、南西方向から北東方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況** 埴土は3層で、上から黄褐色シルト質細砂、暗灰黄色シルト混じり細砂、灰黄褐色シルトである。
- 出土遺物** 底部が平高台を有する須恵器の碗が出土しているが、小片のため図化できなかった。底部は回転糸切りにより切り離されている。
- 時期** 須恵器の碗の底部形態から判断して、11世紀後半と考えられる。

SD 2 6

- 検出状況 Ⅲ区中央付近で検出された(第66図)。SD25・SD27に切られている。
- 形状・規模 溝の方向は南西から北東である。長さは8.12mが検出された。幅は検出面で90～48cm、溝底で48～22cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは16cmである。溝底の標高は南西端で6.54m、北東端で6.46mであり、その方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況 埋土は1層で、暗灰黄色細砂混じり極細砂である。
- 出土遺物 須恵器の坏Aが出土している。
- 時期 出土遺物から判断して、奈良時代と考えられる。

SD 2 7 (図版39)

- 検出状況 Ⅲ区北西半部で検出された(第66図)。SD23～SD25につながり、SD29に切られている。
- 形状・規模 方向は東から北西である。長さは21.9m検出した。幅は検出面で1.33m～72cm、溝底で81～28cmを測る。断面は逆台形ないしU字形を呈し、検出面からの深さは20cmである。溝底の標高は東端で6.41m、北西端で6.39mで、その方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況 3層からなり、上から暗オリーブ褐色細砂一極細砂、黒褐色極細砂、黒褐色シルト質極細砂である。
- 出土遺物 須恵器の椀の底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。底部は平高台をなすもので、回転糸切りにより切り離されている。
- 時期 須恵器の椀の底部形態から判断して、11世紀後半と考えられる。

SD 2 8

- 検出状況 Ⅲ区北西半部で検出された(第66図)。SD24に平行する短い溝である。
- 形状・規模 溝の方向は南東から北西で、長さは4.76mが検出された。幅は検出面で66～38cm、溝底で35～20cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは13cmである。溝底の標高は南東端で6.59m、北西端で6.55mであり、その方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況 灰黄褐色シルト1層からなる。
- 出土遺物 全く出土していない。
- 時期 SD29と埋土が同じことから、11世紀後半～12世紀前半と考えられる。

SD 2 9

- 検出状況 Ⅲ区北西半部で検出された(第66図)。SD21に切られ、SD23、SD30～SD32を切っている。
- 形状・規模 溝の方向は北東から南西である。長さは7.75mが検出された。幅は検出面で59～25cm、溝底で42～12cmを測る。断面は平底を呈し、検出面からの深さは3cmである。溝底の標高は北東端で6.59m、北西端で6.58mであり、その方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況 埋土は1層で、灰黄褐色シルト混じり極細砂である。
- 出土遺物 土師器の羽釜の鈎が出土している。小片のため図化できなかった。
- 時期 出土土器から時期の特定は困難であるが、当遺跡の他の羽釜の出土状況から判断して、

12世紀前半を中心とした時期と考えられる。

SD30 (図版43)

- 検出状況** III区北西隅付近で検出された(第66図)。SD29に切られ、SD28の延長線上にある。
- 形状・規模** 溝の方向は南東から北西である。長さは14.6mが検出された。幅は検出面で59~23cm、溝底で28~14cmを測る。断面はU字形ないし逆台形を呈し、検出面からの深さは18cmである。溝底の標高は南東端で6.58m、北西端で6.42mであり、その方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況** 暗黄灰色シルト1層からなる。
- 出土遺物** 356の緑釉の碗の口縁部片が出土している。小片のため、口径を復元することはできなかった。
- 時期** 出土した緑釉が唯一の根拠となるが、小片のため時期の特定は困難である。ただし、緑釉の時期から判断して、平安時代後期以前と考えられる。

SD31 (図版39・43)

- 検出状況** III区北西隅付近で検出された(第66図)。SD29に切られ、SD32を切っている。
- 形状・規模** 溝の方向は南東から北西である。長さは7.36mが検出された。幅は検出面で89~70cm、溝底で36~30cmを測る。断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは30cmである。溝底の標高は南東端で6.54m、北西端で6.43mであり、その方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況** 埋土は2層で、上層が灰黄褐色シルト質極細砂、下層が黒褐色シルトである。
- 出土遺物** 352の須恵器碗1個体が出土している。底部は平高台をなすが、内面見込みの落ち込みは認められない。底部は回転糸切りにより切り離されている。
- 時期** 出土した須恵器碗の底部形態から判断して、12世紀前半と考えられる。

SD32

- 検出状況** III区北西隅付近で検出された(第66図)。SD29・SD31に切られている。
- 形状・規模** 溝の方向は北西から南東である。長さは5.83mが検出された。幅は検出面で96~42cm、溝底で62~22cmを測る。断面は平底ないし浅いU字形を呈し、検出面からの深さは11cmである。溝底の標高は北西端で6.55m、北東端で6.52mであり、その方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況** 褐灰色シルト質極細砂1層からなる。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** 他の溝と埋土が類似していることから、平安時代と考えられる。

SD33 (図版43 写真図版179)

- 検出状況** III区北西隅付近で検出された(第66図)。SD27には接するように流れている。
- 形状・規模** 溝の方向は南東から北西である。長さは4.52mが検出された。幅は検出面で82~38cm、溝底で56~18cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは14cmである。溝底の標

第4節 III区の調査

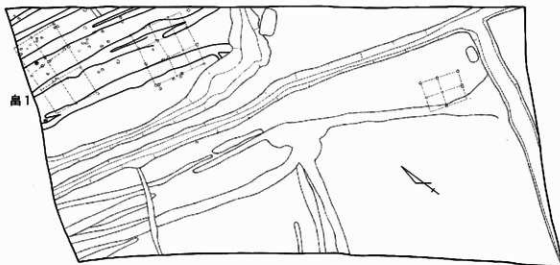
高は南東端で6.54m、北西端で6.46mであり、その方向へ流れていたものと思われる。

- 埋没状況 埋土は1層で、暗黄灰色極細砂混じりシルトである。
- 出土遺物 遺物は土器と石器が出土している。
- 土器 須恵器坏Bが出土している。小片のため固化はできなかった。
- 石器 S56は凝灰質砂岩製の砥石である。欠損が著しく元の形は不明であるが、長方形に近い形状のものと推定される。長さ11.0cm、幅8.6cm、厚さ6.1cm、重さ693.2g。
- 時期 出土土器から判断して、奈良時代と考えられる。

SD34

- 検出状況 III区南西辺中央で検出された（第66図）。
- 形状・規模 溝の方向は北東から南西である。長さは2.76mが検出された。幅は検出面で36～30cm、溝底で24～16cmを測る。断面は平底を呈し、検出面からの深さは6cmである。溝底の標高は両端とも6.58mであり、流れていた方向は不明である。
- 埋没状況 暗黄灰色シルト1層からなる。
- 出土土器 須恵器の碗の底部片が出土しているが、小片のため固化できなかった。平臺をなすもので、底部は回転糸切りにより切り離されている。
- 時期 須恵器の碗の底部形態から判断して、11世紀後半と考えられる。

V. 畠



第67図 III区第1面(2) 畠1

畠1 (図版43・44 写真図版33)

- 検出状況 調査区北隅のSD16に囲まれた、他より一段高くなった所で検出した。SB09・SB10と切り合い関係にあるが、その前後関係は明確にできない。詳しくは第6章第3節で検討する。
- なお、畠1については、当地区に限られものではなく、IV区で検出した畠跡と一連のものである。そこで、詳細については次のIV区の項で報告することにした。

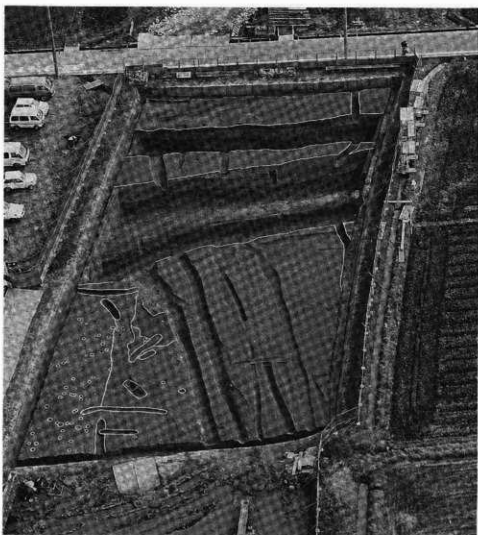
4. 第2面の調査

(1) 概要 (図版45 写真図版34・35)

概要

Ⅲ区第2面では、調査区を横断する大規模な溝SD47・SD48が顕著な遺構である。これらの溝は集落を囲むいわゆる環濠であると考えられる。SD48は弥生時代中期初頭には掘削され、幾度かの埋没→再掘削の過程を経て、古墳時代中期には完全に埋没している。SD47については時期の確定が困難であるが、SD48とはほぼ同じ時期に機能していたものと考えられる。これらを切って流れる溝SD13はⅠ区・Ⅱ区から続く溝である。

この他、調査区の北コーナー付近で若干の溝と土坑および柱穴群が集中して検出されている。



第68図 Ⅲ区第2面

第4節 Ⅲ区の調査

(2) 調査の結果

1. 土 坑



第69図 Ⅲ区第2面 土坑

SK08 (図版46 写真図版42)

検出状況 Ⅲ区北隅付近の土坑・溝・柱穴の集中する部分にある(第69図)。SD51の南にあってSD50やSK09の北側に位置する。

形状・規模 平面形はややいびつな長方形で、長軸方向で2.23m、短軸方向で72cmを測る。横断面は箱形を呈し、最深部における検出面からの深さは30cmを測る。長軸はN85°Wを指向し、ほぼ東西方向を向いている。また、縦断面にみられるように、西側は2段掘りになっている。この中段付近のレベルで炭の面的な広がりを確認している。

埋没状況 埋土は複雑な堆積状況を呈し、炭を含む黒褐色極細砂と灰色細砂が入り込んでおり、1層・2～6層・7～14層と大きく3つに分かれ、断続的に埋没したと考えられる。2～6層は、土器を含み、炭を多く含む。

出土遺物 弥生時代中期の甕1個体(363)が出土している。口縁部は内外面を横ナデ調整により、体部内面はナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

SK09 (図版47 写真図版42・123)

検出状況 調査区北部で検出し、SD50の西側に位置する。他の遺構との切り合いは認められない。

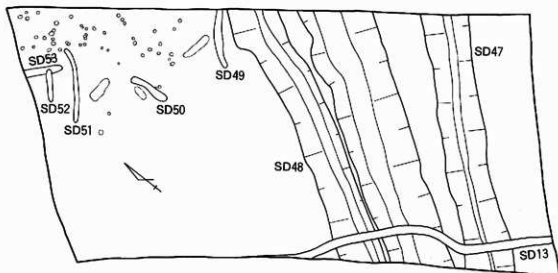
形状・規模 平面形は長楕円形で、北北東-南南西に主軸をとる。主軸方向で1.28m、その直交方向で48cmを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは6cmを測る。

遺物出土状況 土坑底に数個体の土器が押しつぶされた状態で出土している。

出土遺物 甕とその底部が数個体(364-369)出土している。甕はいずれも体部上半から口縁部にかけて残存するもので、口縁部は如意形をなす。体部上半から頸部直下にかけて5条1単位の櫛状直線紋が4単位描かれている。

時期 甕の特徴から、弥生時代前期末-中期初頭と考えられる。

II. 溝



第70図 III区第2面 溝

SD13 (図版48)

検出状況 III区南部で検出した(第70図)。I区・II区から続く溝で、SD47・SD48を切っている。

形状・規模 全体的に蛇行気味であるが、大きくは南東から北西方向にのびている。南東側はI区へ繋がり、北西側は調査区外までのびている。検出した長さは22.5mである。横断面は箱形に近い逆台形を呈し、検出面における幅は62~78cmを測る。最深部における検出面からの深さは60cmである。底部の幅は24~44cmを測り、底部の標高は南東端で6.00m、北西端で6.04mである。

埋没状況 4層からなるが、いずれも人為的に埋め戻された層である。多くは黒色シルトなどをブロック状に含んでいるが、これは当遺構を検出した面を上面とする土壌層Iに対応するものである。したがって、当遺構を埋めもどすにあたっては、当時の地表面をなす表土をもって埋め戻しているものと考えられる。

出土遺物 壺と甕の小片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。量的にも少ない。壺は二重口縁壺の一部が、甕は口縁部・体部・底部の各片が出土している。

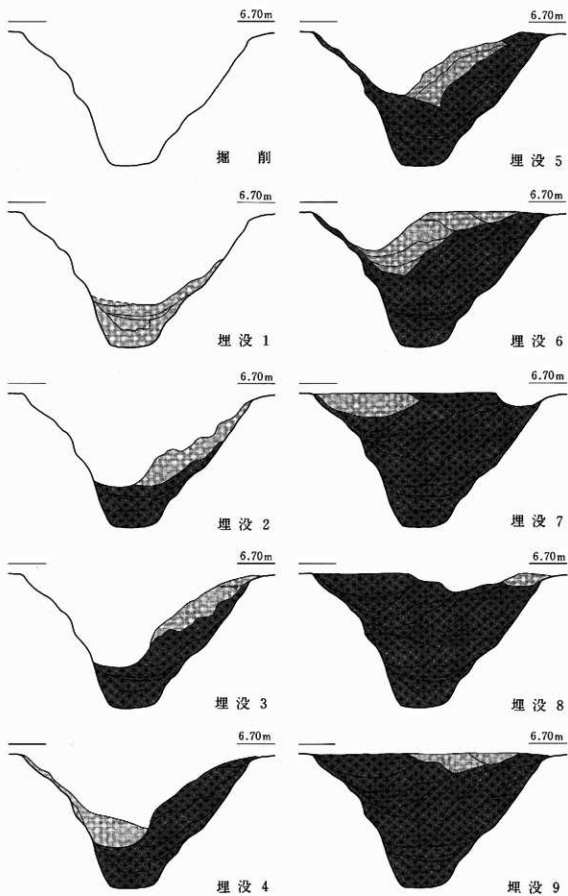
時期 出土遺物については、人為的に埋められた土の中から出土したものであり、当遺構の時期を判断する直接的な根拠とはなりえない。そこで、弥生時代後期に埋没するSD48を切っていること、第1面(2)では検出されなかったことなどから、弥生時代後期から奈良時代にかけての時期と考えられる。

SD47 (図版48 巻首図版5 写真図版36)

検出状況 調査区東部で検出した(第70図)。SD48の東側に位置し、SD13に切られている。

形状・規模 北東-南西方向にはほぼ直線的にのびる溝である。北東側・南西側ともに調査区外までのびている。検出した長さは22.68mである。横断面はV字形をなし、検出面における幅は3.48m~4.22mを測る。最深部における検出面からの深さは1.9mを測り、底部における幅は18~70cmである。底部の標高は、北東端で4.67m、南西端で4.71mである。

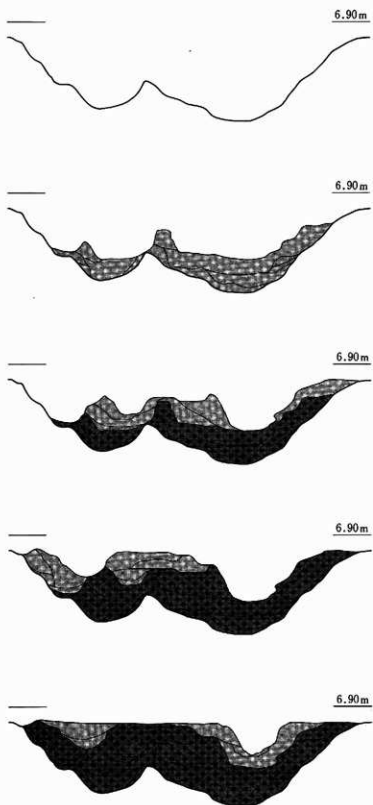
第4節 Ⅱ区の調査



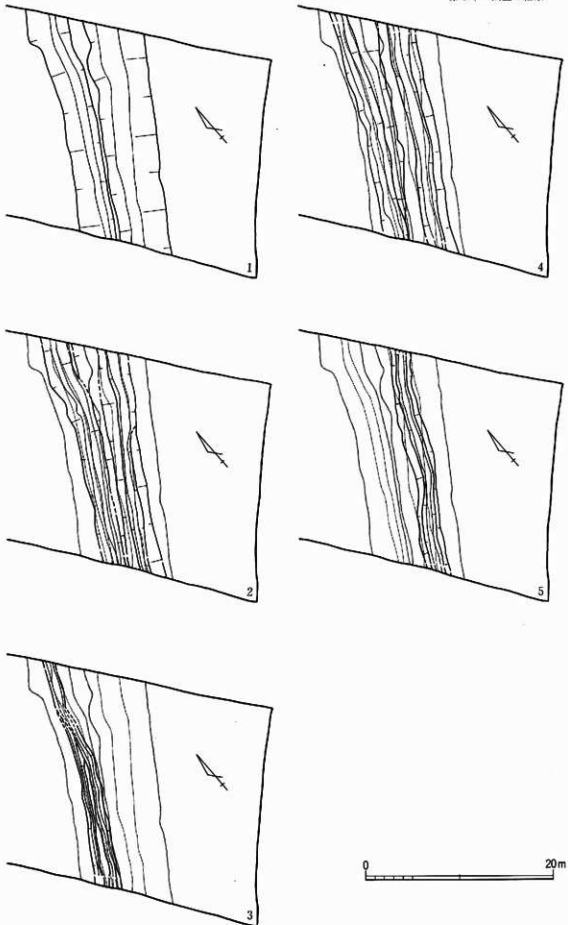
第71図 SD47埋没過程

- 埋没状況** 当溝は一気に埋没したのではなく、埋没→再掘削→埋没のパターンを繰り返して埋没していった。当溝の土層断面の観察においては、上記のパターンが少なくとも9回認められる(第71図)。ただし埋没に関しては、洪水によるものと人為的な埋め戻しによるものとが認められる。
- 埋没1** まず18層の暗黒灰色シルト-粘土が水の流れのない状態で堆積後、洪水砂によりある程度まで埋没する。この時の洪水を示すのが15~17層に対応するものである。この洪水による埋没後、再掘削されている。この痕跡が15層上面のラインである。
- 埋没2** 次の洪水による堆積を示すのが14層の淡黒灰色極細砂質シルトであり、この層の上面がこの洪水後の再掘削を示すラインである。14層の一部は当溝の北東側肩部まで堆積が認められることから、この洪水により一旦は当溝がほぼ完全に埋没したものと考えられる。
- 埋没3** 14層上面での再掘削後の洪水を示すのが11層で、当溝の肩部まで同層が及んでいることから、この洪水においても当溝がほぼ完全に埋没したものと考えられる。
- 埋没4** 次の堆積を示すのが12・13の両層である。12層についても、前述した14層同様、当溝のほぼ肩部まで堆積していることから、この洪水層についても一旦は当溝をほぼ完全に埋めたものと考えられる。そして12層の上面が、次の再掘削を示すラインである。
- 埋没5** 以後は、人為的に埋められていく。この過程を示すのが6層~10層である。これらの層のなかでも6層~8層と9層~10層とに大きく分けることができる。これらの層による埋め戻しにより一旦はほぼ完全に埋没したのもと考えられるが、その後も再掘削がおこなわれている。それを示すのが5層の下端のラインである。
- 埋没6~9** その後、4層と5層とによって再び人為的に埋め戻され、当溝はまた完全に埋没する。しかし、埋没後も1層~3層によって、小規模な掘削が行われたようであるが、その後についても人為的に埋め戻されている。
- 以上のように、埋没→再掘削→埋没のパターンを繰り返す過程を経て当溝が埋没していったのであるが、この埋没過程に大きな変化を認めることができる。これは、11層の堆積を境として、それ以前はいずれも洪水による堆積→再掘削の繰り返しであったのが、同層堆積以後は、いずれも人為的な埋め戻し→再掘削の繰り返しとなっている点に大きな特徴が認められる。
- 出土遺物** 当溝は当遺跡のなかでも大規模な溝であるが、出土遺物は極めて少ない。当溝の下層から弥生時代後期の土器片がわずかに出土しているが、小片のため固化できなかった。
- 時期** 出土遺物が極めて少ないため、時期を特定することは困難であるが、出土土器から弥生時代後期以前に掘削され、それ以降に埋没したのもと考えられる。ただし、その掘削がいつまでさかのぼるのかについては明確にできない。
- SD 4 8** (図版49~57 巻首図版5 写真図版37~41・123~128・179~181)
- 検出状況** Ⅲ区中央部の南東よりにあり、SD47の北西に位置する(第70図)。調査区を横断するよりに流れる大きな東西2本の対の溝である。
- 形状・規模** 溝の方向はいずれも北東から南西である。検出した長さは東溝:SD48(東)で22.2m、西溝:SD48(西)で23.8mが検出された。幅は、東溝は検出面で6.28~5.38m、溝底で

第4節 Ⅲ区の調査



第72図 SD48埋没過程 (1)



第73図 SD48埋没過程 (2)

第4節 III区の調査

2.30～1.18mを測る。西溝は検出面で4.50～3.22m、溝底で1.02～0.56mである。この東西2本の溝を合わせた幅は検出面で9.2～11mになり、かなりの規模の溝であることがわかる。完掘状況の断面は、偏ったW字形ともいべき形状を呈し、検出面からの深さは東溝で2.10m、西溝で1.91mである。溝底の標高は東溝の北東端で4.67m、南西端で4.56mで、西溝の北東端で4.73m、南西端で4.81mであるが、いずれも北東方向から南西方向へ流れていたものと考えらるべきであろう。

埋没状況 断面図にみられるように、当溝は複雑な堆積状況を示している（第72図・第73図）。まず、最上層で検出した段階では、全く別の東西2本の溝とみなしていた。しかし、完掘時には東西2本が対になったW字形の溝と考えるようになった。また、この溝は埋没していく過程で、幾度か掘り直されたものと思われる。一気に埋没した灰色の洪水砂やワジナと流れがよどみゆっくり堆積した黒褐色シルトをてがかりに、東溝で4回、西溝で5回の埋没の単位に大きく分けて調査している。なお、それぞれの埋没時の溝の中心は東溝ではあまり移動していないのに対して、西溝はとくに上層の3本の溝の中心が西に東に大きく移動している状況がみとめられ、両者の性格の違いを示すものとも考えられる。

出土遺物 土器と石器が出土している。

土器 弥生時代中期と後期の土器が出土している。

中期 東溝の下層出土土器・上層出土土器と西溝の下層出土土器・上層出土土器の大きく4地点から出土している。

(東)下層 甕と甕が出土している。

甕 広口長頸甕の口縁部(370・372・373)・体部片(371・374・375)・底部(376～378)が出土している。広口長頸甕はいずれも口縁部を拡張しているが、端部に³⁷⁰373は刺突紋を、373は波状紋を施文している。また373については、器表面の遺存状況がよくないため明確ではないが、わずかに口縁部内面および頸部に櫛描波状紋が観察できる。

体部片については、いずれも櫛描による施文が観察できる。371は6条からなる櫛描直線紋7帯が施文され、上から3帯目と4帯目の間に三角刺突紋を施文している。374は、櫛描直線紋の他に櫛描による流水紋の一部が観察される。375は10条からなる櫛描直線紋と9条からなる櫛描波状紋が交互に施文されている。

この他、377の内面には当該期の土器にはめずらしくヘラ削りが観察される。

甕 口縁部が逆L字形をなすもの(379・380)と、如意形をなすもの(381～384)と底部片(385～389)が出土している。

逆L字形をなす甕のなかで、379は口縁部を貼り付け、端部に刻み目を施している。また、如意形をなす甕のなかで、381の体部上半には、それぞれ5条からなるヘラ削り線紋が3帯観察される。各単位の沈線はそれぞれ平行していることから、ヘラ状のものを櫛状に東ねて施文したものと考えられる。

(東)上層 甕・甕・高杯・蛤甕の各器種が出土している。

甕 直口甕(390・391)と無頸甕(392)および底部(393)が出土している。392は、体部内外面をヘラ磨きにより丁寧に仕上げている。

甕 口縁部片(395・396)と底部片(397・398)が出土している。底部片については残存状

況がよくないため、内面の調整法については観察できない。

高坏 坏部(399)と脚部(400~405)が出土している。坏部の399は皿形を呈するタイプで、内外面とも丁寧なへら磨きにより仕上げられている。また、体部と口縁部の変換部に2条の凹線紋が施されている。

甕 マグコ壺(406)と飯埴壺(407)が出土している。

マグコ壺は飯埴壺を大型化したもので、底部はわずかに平底をなす。体部上半に径1.9cmの純穴が2箇所認められるほか、底部中央にも径2.4cmの穿孔が認められる。口縁部は内外面ともナデ調整により、体部は内面をナデ調整により、外面を縦方向のへらナデ調整により、それぞれ仕上げられている。

(西)下層 壺と鉢が出土している。

壺 広口長頸壺(408)と底部片(410・411)が出土している。

鉢 409の1個体である。蓋の可能性も考えられるが、本報告では鉢の底部と考えた。

(西)上層 壺・甕・高坏・器台・鉢・土製紡錘車の各器種が出土している。

壺 広口壺(412~414)と直口壺(415・416)と底部片(417~419)が出土している。

412と413は、口縁端部を拡張し、端面に2段にわたって櫛描波状紋を施し、413の頸部には凹線紋が施されている。414は体部上半に6条の櫛描波状紋を7段にわたって施文している。

甕 口縁部(420・421)と底部(422)が出土している。

高坏 坏部が皿形を呈するもの(424~426)、いわゆる木器形高坏(423)、脚部(427~429)が出土している。423は、体部内面を横方向、外面を縦方向のへら磨きにより仕上げられている。424は、図化できなかったが、体部内面にもわずかにへら磨きの痕跡が観察される。425の内面と426の外面はナデ調整により仕上げられている。

器台 430の1個体である。脚部上半に5条からなる櫛描直線紋が、下半に4条の凹線紋が施されている。

鉢 431の1個体である。形態的に後期に近い。上層から後期の土器が出土していることから、上層からの土器の混入の可能性も考えられる。

他 432の土製紡錘車が1点出土している。径1cmの穴が穿孔されている。

後期 溝の東上層、中央上層(SD48上層:図版49 16・17層)、西上層の3地点から出土している。

(東)上層 甕・鉢・壺・器台・高坏を図化した。

甕 体部の調整は、タタキのみの個体と、その後体部上半にハケ目調整の認められる個体の両方が存在する。口縁部の成形は叩き出し技法を採用するものが認められ、端部の形態は面をもつものから丸いものまで種類が多い。底部はドーナツ底、平底があり、台付きのものもある。また、有孔のものもある。

鉢 中型・小型の2者がある。中型は甕の下半と同じ形態・製作方法である。小型は底部が若干台状になっているものがある。

壺 広口壺と二重口縁壺が図示できたが、遺存状況は悪い。広口壺は、中型と小型の2者があるが、後者はさらに口縁部の形態から、短く直立するもの(455・456)と、外側へ大き

く屈曲するもの(458)の2種類に分かれる。

器台 破片のため、全体の形態は不明であるが、1点のみ図化できた。

高杯 形態の差が大きい3点が図化できた。

461は深い鉢状の坏部をもち、調整はハケメのみが観察できる。462は体部と口縁部の境に沈線が巡る。脚部には穿孔が認められるが、数は不明である。463は小型で、浅く直線的に開く坏部をもつ。調整は脚部内面に横方向のケズリが認められるが、それ以外は磨滅のため不明である。

中央上層 甕・壺・高杯・器台を図化した。

甕 1点のみ図化できた。外面はタタキのみで成形されている。

壺 広口壺が2点図化できた。口縁部が大きく開く465と、直立気味の466がある。また、壺の底部と思われる破片467があり、ドーナツ底である。

高杯 脚部のみで、全体の形状は不明である。円形の透かしが3方に認められる。

器台 口縁部で上方に屈曲している。体部には4方の透かしが確認され、高さが互い違いになっている。

(西)上層 甕・鉢・壺・高杯・器台を図化した。

甕 大型(470・474・476)、中型(471・473・475・477・481)、小型(485・488)のいずれもが図化できた。

大型は底部まで復元できたものはない。外面の調整は、474がタタキの後、縦方向のハケ目が認められるが、それ以外はハケ目が認められない。

中型は472が球形を呈し、底部が余り突出せず、口縁端部がやや上方につまみ上げられているという特徴があるが、他の個体は大型の甕とかわりない。調整は、タタキの後ハケ目を施すものと、施さないものの両者がある。また、口縁部には叩き出し技法が認められるものもある。

小型は確認できるものはすべて口縁部叩き出し技法が認められる。

鉢 大型の鉢と小型の鉢がある。大型の鉢には底部付近に左上がりのタタキが確認できる。小型の鉢は2点とも内面がヘラミガキにより調整されている。

壺 広口壺と二重口縁壺がある。広口壺の493には斜格子の籠目の痕跡が認められる。

二重口縁壺は遺存状況が悪く、調整などは不明であるが、その中で大型の495は残りがよい。

高杯 口縁部が外反するもの(498-501)と、碗形を呈するもの(502)の2種が認められる。これら以外に、脚部だけの504がある。

器台 脚部の破片503が出土している。小片のため全体の形状は不明である。

石器 S57からS59がサヌカイト製の石器である。

S57は有爪式の石鏃である。茎と鏃身の区別はなく、柳葉形の整美な形態をとる。長さ4.25cm、幅1.15cm、厚さ0.4cm、重さ1.9g。S58はいわゆる削器である。長さ5.6cm、幅3.45cm、厚さ0.7cm、重さ12.9g。S59は打製穂柄具と考えられる削器であるが、通常みられるサヌカイト製打製穂柄具とは異なり、定型化した形に仕上げられておらず、二次加工も打面側と末端側の背面側に施されているだけである。使用痕は特に認められない。

S60は偏平ないわゆる石包丁状の刃器で灰青色砂岩製である。節理に沿って斜離した素材を研磨しているが、一部に節理面が残る。下端に両面から研ぎ出された刃が付けられているが、一片刃のようにみえる。また刃部には使用による磨減が刃に対して垂直にみとめられる。欠損のため元の形は不明である。長さ9.3cm、幅6.25cm、厚さ1.2cm、重さ83.0gである。

S61は叩き石と考えられる。一部欠損しているが、楕円形の平たい石で、片側の側面に抉りが入っている。また、図化した面の中央よりやや下よりに敲打痕がある。長さ11.65cm、幅8.7cm、厚さ2.35cm、重さ323.1gである。S62は磨石である。転石をそのまま利用したものと思われる。長さ9.95cm、幅7.65cm、厚さ6.45cm、重さ702.6gである。

時 期 出土土器から判断して、弥生時代中期～後期後半と考えられる。

SD49

検出状況 Ⅲ区中央付近にあり、SD48の北西に位置する(第70図)。

形状・規模 溝の方向は北東から南西である。長さは5.04mが検出された。幅は検出面で69～42cm、溝底で32～20cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは24cmである。溝底の標高は両端とも6.25mで、流れていた方向は不明である。

埋没状況 2層に分けられ、上層は暗灰黄色極細砂、下層は黒褐色シルトである。

出土遺物 奈良時代の須恵器の坏Bや坏Aや椀に近い底部、土師器の甕が出土している。

時 期 出土遺物から、奈良時代と考えられる。

SD50

検出状況 Ⅲ区北部で検出された(第70図)。SK09の東に位置する。

形状・規模 溝の方向は北から南である。長さは3.54mが検出された。幅は検出面で70～44cm、溝底で48～28cmを測る。断面は浅いU字形を呈し、検出面からの深さは9cmである。溝底の標高は北端で6.65m、北東端で6.64mであり、北方向から南方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況 黒褐色シルト混じり極細砂1層からなる。

出土遺物 全く出土していない。

時 期 SD49・SD52と埋土が同じことから、奈良時代と考えられる。

SD51

検出状況 Ⅲ区北部で検出された(第70図)。SD52・SD53の南東にある。

形状・規模 溝の方向は北北東から南西である。長さは7.58mが検出された。幅は検出面で40～32cm、溝底で22～14cmを測り、比較的幅が一定している。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは12cmである。溝底の標高は北北東端で6.66m、南西端で6.58mであり、その方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況 黒褐色シルト混じり極細砂1層からなる。

出土遺物 弥生時代後期の土器片と思われる器壁の薄い土器片が出土しているのみである。

第4節 Ⅲ区の調査

時期 出土土器から判断して、弥生時代中期もしくは同後期と考えられるが、中期の可能性が高い。

SD52

検出状況 Ⅲ区北部で検出された(第70図)。SD53を切っている。

形状・規模 溝の方向は北東から南西である。長さは2.88mが検出された。幅は検出面で47~38cm、溝底で29~20cmを測り、幅が一定している。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは18cmである。中央の溝底の標高は6.46mである。

埋没状況 2層からなり、上下とも黒褐色シルト混じり極細砂。上層の方が明るい色調である。

出土遺物 全く出土していない。

時期 埴土がSD51に類似することから、弥生時代中期以降と考えられる。

SD53

検出状況 Ⅲ区北部で検出された(第70図)。SD52に切られている。

形状・規模 溝の方向は北西から南東である。長さは3.29mが検出された。幅は検出面で62~58cm、溝底で46~28cmを測り、比較的幅が一定している。断面は浅いU字形を呈し、検出面からの深さは10cmである。中央の溝底の標高は6.44mである。

埋没状況 黒褐色シルト混じり極細砂1層からなる。

出土遺物 全く出土していない。

時期 SD52との切り合い関係から、弥生時代中期以前と考えられる。

5. 第3面の調査

(1) 概要 (図版58 写真図版43)

概要 III区第3面では、第2面で検出された環濠SD48より南東にあたる部分では水田畔畔が検出されており、それより北西の部分では土坑や木棺墓などの遺構が、密度は希薄であるが確認されている。こうした遺構の分布から、SD48付近にこの面での土地利用の境となる遺構が存在した可能性が考えられる。



第74図 III区第3面

第4節 Ⅲ区の調査

(2) 調査の結果

I. 墓



第75図 Ⅲ区第3面 墓

SX01 (図版59 写真図版43)

検出状況 SK10の西側に位置する。

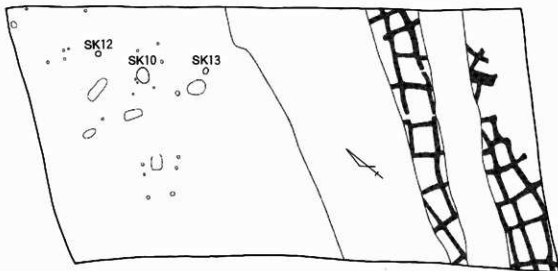
形状・規模 掘り方の平面形は隅丸長方形で、長軸方向で1.60m、その直交方向で77cmを測る。内側の木棺部分は長方形で、長軸方向で1.18m、短軸方向で43cmを測る。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは40cmを測る。

埋没状況 棺内は黒褐色シルト混じり極細砂と極細砂混じりシルトの2層からなる。

出土遺物 全く出土していない。

時期 第3面で出土していることから、弥生時代前期と考えられる。

II. 土坑



第76図 Ⅲ区第3面 土坑

SK10 (写真図版43)

- 検出状況 SX01の東側に位置する。
- 形状・規模 平面形はほぼ円形で、長軸方向で1.42m、その直交方向で1.10mを測る。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは33cmを測る。
- 埋没状況 黄灰色シルト質極細砂1層からなる。
- 出土遺物 全く出土していない。
- 時期 第3面で出土していることから、弥生時代前期と考えられる。

SK12 (図版59 写真図版43)

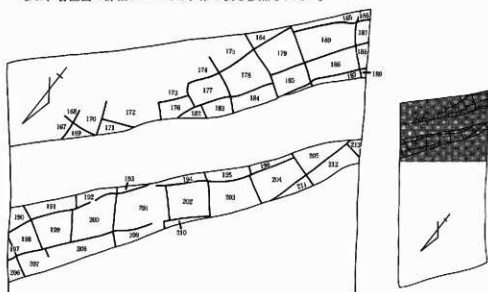
- 検出状況 SK10の北側に位置する (第76図)。
- 形状・規模 平面形は不整形で、長軸方向で50cm、その直交方向で48cmを測る。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは24cmを測る。
- 埋没状況 上層に浅く黄灰色シルト質極細砂が堆積し、下層は黒褐色シルト質極細砂混じりシルトである。
- 出土土器 505の鉢1個体が出土している。体部から口縁部にかけては残存状況がよくないため、その調整方法は観察できない。2~4mm大の砂粒を多く含んでいる。
- 時期 出土土器から判断して、弥生時代前期末~中期初頭と考えられる。

SK13 (図版59 写真図版43)

- 検出状況 SK10の南東側に位置する (第76図)。
- 形状・規模 平面形は長方形で、長軸方向で52cm、その直交方向で41cmを測る。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは25cmを測る。
- 埋没状況 上層は黄灰色シルト質極細砂で、下層は黒褐色シルト質極細砂層であり、底部付近に土器や石が散乱していた。
- 出土土器 506の鉢1個体が出土している。底部を欠くが、ほぼ半球形を呈する。内面については剥離が顕著なため、その調整方法は観察できない。
- 時期 当遺構出土の鉢の類例が、弥生時代前期中頃の東奈良遺跡溝25中層から出土している。よって、当遺構についても弥生時代前期と考えたい。

Ⅲ. 水田跡 (図版58 写真図版44)

- 水田跡** 第3面の南部の約3分の1の範囲で水田跡を検出した。その面積は約300㎡に及ぶ。
- 畦 畔** 畦畔は一部幅40cmと広い部分があるが、その続きが見当たらない。他は基本的に同規模の幅で、いわゆる大畦畔・小畦畔の区別はないものと思われる。断面は台形を呈し、畦の幅は検出面で10~20cm、底で20~30cmを測る。水田面からの高さは5cmである。
- 平面形** 水田の区画は台形で、1辺の長さは5~3m。一区画の広さは約1.5~4.7㎡である。
- 標 高** 水田面の標高は南側ほど低くなる傾向がある。もっとも高い水田で6.43m、最も低い水田で6.30mと、13cmの比高差がある。
- なお、各区画の詳細については、第9表を参照されたい。



第77図 Ⅲ区第3面 水田跡

第9表 Ⅲ区第3面 水田跡一覧表

()内は検出面積

No.	標高 (m)	面積 (㎡)	No.	標高 (m)	面積 (㎡)	No.	標高 (m)	面積 (㎡)
164	6.38	(0.7)	181	6.41	(0.8)	198	6.41	1.5
165	6.38	(1.1)	182	6.38	(0.7)	199	6.42	2.9
166	6.38	(0.2)	183	6.37	(1.3)	200	6.42	4.2
167	6.37		184	6.38	(7.2)	201	6.42	6.0
168	6.39		185	6.39	2.1	202	6.37	4.1
169	6.36	(0.6)	186	6.39	3.2	203	6.36	(4.6)
170	6.36		187	6.39	(0.8)	204	6.32	(3.8)
171	6.36	(0.6)	188	6.39	(0.6)	205	6.35	(2.6)
172	6.39		189	6.39	(0.1)	206	6.43	(0.8)
173	6.39		190	6.42	(0.8)	207	6.43	(1.8)
174	6.39		191	6.42	(1.1)	208	6.43	(4.0)
175	6.39		192	6.43	(0.9)	209	6.42	(1.5)
176	6.41	(2.1)	193	6.41	(0.2)	210	6.39	(0.4)
177	6.38	2.4	194	6.38	(0.8)	211	6.30	(1.7)
178	6.37	3.6	195	6.36	(1.3)	212	6.29	(2.4)
179	6.41	3.7	196	6.41	(0.7)	213	6.31	(0.5)
180	6.39	4.7	197	6.44	(0.1)			

6. 第4面の遺構

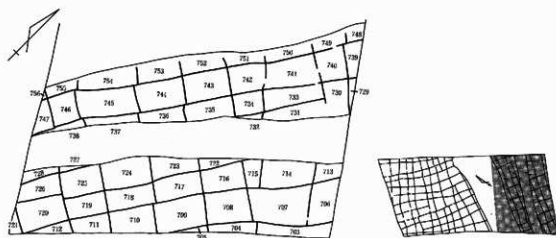
(1) 概要 (図版60 写真図版45)

Ⅲ区全域にわたって水田跡を検出している。

(2) 調査の結果

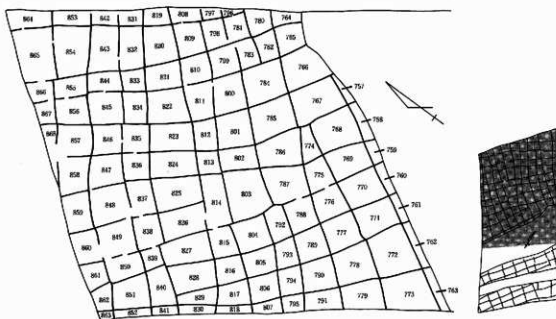
水田跡 (写真図版46・47)

- 検出状況** 当遺構面全面にわたって検出した。Ⅱ区第4面で検出した水田跡に続くものである。ただし、第2面で検出したSD47とSD48により大きく掘り込まれている箇所については、遺存していなかった。なお、当調査区で検出した水田跡の面積は1,096㎡に及ぶ。
- 畦 畔** 基本的に同規模のもので、いわゆる大畦畔のようなものは認められない。断面溝斜形をなし、基底部における幅20cmを測り、水田面からの高さは10cmである。
- 平面形** 基本的には方形もしくは長方形を指向する。
- 面積** 各区画の面積は一定ではなく、狭い区画で1.1㎡、広い区画で8.1㎡とバリエーションが認められる。平均で3.74㎡である。
- 標 高** 水田面の標高は、北側ほど高い傾向にある。最も高い水田面で5.92m、最も低い水田面で5.67mで、その比高差は25cmである。
- なお、各区画の詳細については、第10・11表を参照されたい。



第78図 Ⅲ区第4面 水田跡(1)

第4節 Ⅲ区の調査



第79図 Ⅲ区第4面 水田跡(2)

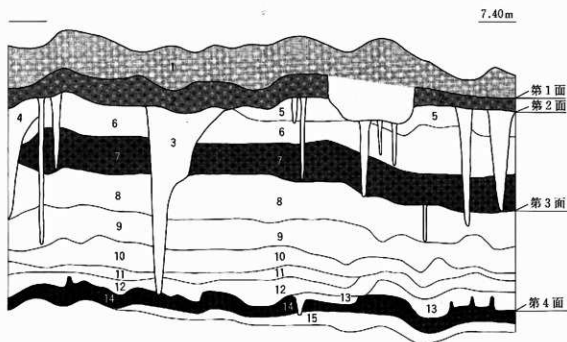
第10表 Ⅲ区第4面 水田跡一覧表(1)

()内は検出面積

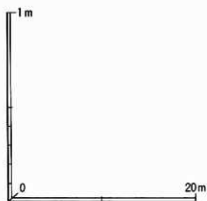
No.	標高(m)	面積(m ²)	No.	標高(m)	面積(m ²)	No.	標高(m)	面積(m ²)
703	5.85	(3.3)	723	5.74	(3.0)	743	5.75	4.6
704	5.79	(1.7)	724	5.76	(5.2)	744	5.73	4.8
705	5.81		725	5.79	4.1	745	5.71	5.8
706	5.87	(4.4)	726	5.73	(3.2)	746	5.70	2.7
707	5.85	8.1	727	5.75		747	5.69	(1.6)
708	5.79	5.3	728	5.71	(1.1)	748	5.75	(1.0)
709	5.79	6.1	729	5.84	(0.3)	749	5.76	(1.6)
710	5.78	(4.6)	730	5.83	(2.9)	750	5.75	(2.1)
711	5.77	(2.5)	731	5.83	(3.1)	751	5.76	(1.7)
712	5.76	(1.0)	732	5.76		752	5.76	(2.8)
713	5.88	(1.5)	733	5.82	3.3	753	5.71	(3.3)
714	5.88	(5.7)	734	5.80	2.2	754	5.71	(4.0)
715	5.78	(1.4)	735	5.75	(4.2)	755	5.67	(1.1)
716	5.79	3.9	736	5.74	(2.5)	756	5.68	
717	5.76	3.9	737	5.71	(1.7)	757	5.80	(0.5)
718	5.78	3.3	738	5.69		758	5.79	(1.5)
719	5.78	3.1	739	5.81	(1.5)	759	5.80	(0.8)
720	5.74	5.4	740	5.82	3.0	760	5.80	(1.1)
721	5.72	(0.7)	741	5.81	5.4	761	5.79	(0.7)
722	5.78	(1.1)	742	5.78	3.5	762	5.76	(1.4)

第11表 Ⅲ区第4面 水田跡一覧表(2)

No.	標高(m)	面積(m ²)	No.	標高(m)	面積(m ²)	No.	標高(m)	面積(m ²)
763	5.72	(1.2)	799	5.84	2.7	835	5.82	2.6
764	5.81	(1.4)	800	5.82	4.3	836	5.82	2.4
765	5.81	(2.8)	801	5.82	4.4	837	5.86	3.2
766	5.81	(5.8)	802	5.81	2.7	838	5.84	2.8
767	5.80	6.8	803	5.80	7.1	839	5.84	1.1
768	5.79	6.0	804	5.80	3.6	840	5.82	3.3
769	5.80	4.6	805	5.80	2.9	841	5.81	(0.7)
770	5.80	4.7	806	5.82	2.5	842	5.82	(1.3)
771	5.79	4.5	807	5.79	(1.1)	843	5.84	4.7
772	5.79	7.0	808	5.82	(1.3)	844	5.82	2.1
773	5.74	(7.0)	809	5.82	3.0	845	5.84	4.0
774	5.84	1.6	810	5.84	2.7	846	5.85	3.0
775	5.84	2.7	811	5.85	3.6	847	5.83	3.8
776	5.80	3.3	812	5.82	2.4	848	5.86	5.1
777	5.80	4.4	813	5.82	1.6	849	5.86	4.2
778	5.79	5.3	814	5.81	4.5	850	5.83	2.8
779	5.79	(4.5)	815	5.80	2.4	851	5.82	4.0
780	5.81	(1.9)	816	5.79	2.1	852	5.80	(1.0)
781	5.85	1.7	817	5.79	2.4	853	5.83	(1.8)
782	5.83	2.0	818	5.80	(0.9)	854	5.84	6.6
783	5.84	1.6	819	5.82	(1.5)	855	5.87	2.3
784	5.82	5.6	820	5.81	4.2	856	5.86	3.1
785	5.80	5.9	821	5.81	3.2	857	5.89	4.0
786	5.81	5.4	822	5.82	4.8	858	5.89	3.9
787	5.82	5.5	823	5.82	4.5	859	5.85	(3.8)
788	5.81	3.3	824	5.80	4.4	860	5.85	(3.2)
789	5.79	3.3	825	5.80	5.6	861	5.85	(2.1)
790	5.79	3.0	826	5.84	4.5	862	5.83	(1.4)
791	5.77	(2.7)	827	5.82	4.7	863	5.79	(0.4)
792	5.80	2.3	828	5.81	4.4	864	5.86	(3.0)
793	5.80	1.9	829	5.81	1.6	865	5.91	(7.6)
794	5.81	2.2	830	5.82	(1.2)	866	5.92	(1.7)
795	5.76	(1.3)	831	5.82	(1.3)	867	5.90	(1.5)
796	5.85	(0.1)	832	5.82	3.5	868	5.91	(1.7)
797	5.82	(0.6)	833	5.82	1.4			
798	5.85	2.0	834	5.82	2.5			



1. 耕作土・床土
2. シルト質極細砂 (土壌層Ⅰ) 2.5Y 6/1 黄灰
3. SD86埋土
4. SD98埋土
5. シルト質極細砂 2.5Y 6/1 黄灰
6. シルト質極細砂 2.5Y 7/1 灰白
7. シルト質極細砂 (土壌層Ⅱ) 2.5Y 5/1 黄灰
8. シルト質極細砂 2.5Y 6/1 黄灰
9. シルト質細砂～中砂 (土壌層) 2.5Y 6/2 灰黄
10. シルト質細砂～中砂 2.5Y 6/1 黄灰
11. シルト質極細砂 (水田土壌層) 2.5Y 5/1 黄灰
12. シルト混じり細砂～極細砂 (洪水砂) 7.5YR 5/2 灰褐
13. シルト質極細砂～細砂 (洪水砂) 5/2 灰褐
14. シルト (土壌層Ⅲ) 7.5YR 1.7/1 黒
15. 粘土 (土壌層) N 3/0 暗灰



耕作土
 土壌層Ⅰ
 土壌層Ⅱ
 土壌層Ⅲ (水田土壌)

第80図 IV区基本土層

第5節 IV区の調査

1. 調査の概要

(1) 基本層序

- はじめに** I区からIII区で確認された基本層序が、当地区でも認められる(第80図)。ただし、I区～III区と比較してより微高地の中心に近いため、レベル的には高くなる傾向にある。
- 現耕作土** 当遺跡の現地表面をなす水田土壌層である。
- 現耕作土と次の土壌層Iとの間は、当調査区北東壁断面においては認められないが、南西壁断面においてはわずかに認められる。I区～III区同様、灰白色シルト質極細砂と黄褐色シルト質極細砂の互層となっている。前者は水田土壌層、後者はその床土にあたるもので、この互層が多くて4組観察される。
- 土壌層I** 黄灰色シルト質極細砂1層からなる。層相から判断して水田土壌と考えられ、さらに後述するように、当土壌層上面において直立して遺構を検出していることから、水田・畠として耕作された土壌層であったことが理解できる。
- 当土壌層の下の層は、黄灰色シルト質極細砂と灰白色シルト質極細砂の2層からなるが、前者の堆積は当調査区全域には認められず、南東部を中心とした、当地区のなかでも微高地の縁辺部にあたる箇所に限られている。後者は、当調査区全域に認められる。
- 土壌層II** 黄灰色シルト質極細砂1層からなる。土壌層Iに対して、南東から北西への傾斜が比較的に顕著である。
- 当土壌層の下層には、上から、黄灰色シルト質極細砂(第80図8層)、黄灰色シルト質極細砂～中砂(第80図9層)、黄灰色シルト質細砂～中砂(第80図10層)、黄灰色シルト質極細砂(第80図11層)、灰褐色シルト泥じり細砂～極細砂(第80図12層)、灰褐色シルト質極細砂～細砂(第80図13層)の6層が堆積している。ただし、13層については、当調査区全域には認められず、調査区南東部に限られている。
- 上記の6層のうち、9層と11層は土壌層で、特に11層についてはその層相から水田土壌と判断される。これに対して、12層と13層は洪水に伴う氾益性の堆積層である。したがって、下層の土壌層IIIの形成以後、少なくとも3回の堆積を観察することができる。13～11層、10・9層、8・7層の3回である。よって、土壌層IIは、最後の3回目の堆積後に土壌化した層と理解できる。
- なお、9層と11層の土壌層については、色調的にその上下の層と明確に識別することが困難であったことから、平面的に検出することはできなかった。また、土層断面の観察においても、これらの土壌層に伴う遺構も確認できなかった。さらに、11層の水田土壌層については、同じく断面観察において、畦畔状の高まりを観察することはできなかった。
- 土壌層III** 黒色シルト1層からなる水田土壌層である。この下層は暗灰色粘土である。当層についても、顕著な土壌層であるが、土壌層IIIのような攪乱が認められないことから、ヨシ類の繁茂に起因する土壌層と考えられる。当層については、部分的にはあるが、約1m～1.3mの堆積を確認している。

第5節 IV区の調査



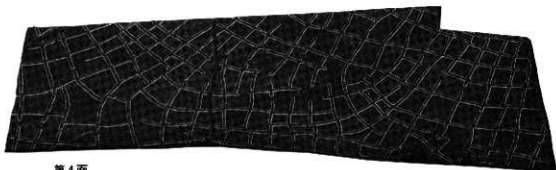
第1面



第2面



第3面



第4面

第81図 IV区の透視

(2) 土壌層と遺構の検出

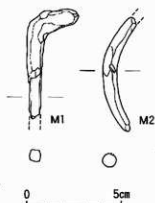
当調査区においても、第1面から第4面の大きく4面にわたり遺構を検出している。

第1面

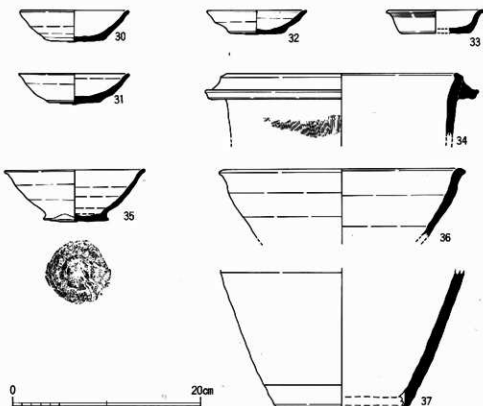
土壌層Ⅰの上面で検出した遺構で、SD16・SD17を除いて埋土は灰白色系を呈する。ただし、当面で検出できた遺構は、鋤溝とそれ以外とにわけられ、切り合い関係から鋤溝の方が新しい。そこで、鋤溝と埋土が現耕作土と大差ないSD16・SD17を第1面(1)としてまず検出し、その後、上記以外の遺構を第1面(2)として検出していった。

第1面(2)では、平安時代後期から鎌倉時代前半にかけての遺構を検出している。当遺構面を検出するにあたって出土した鉄釘(第82図)、瓦(第84図)、土器(第83図)も、上記の年代観と一致するものである。主な遺構としては、掘立柱建物跡・畝・井戸・墓・溝・土坑などを検出している。

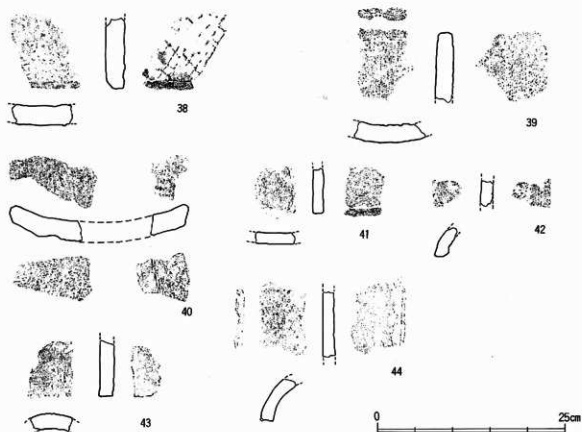
なお、第1面(1)では、鋤溝とSD16・SD17以外に、数条の溝状遺構を検出しているが、遺物も含まれず、検出面から浅いこと等から、その性格を明らかにすることはできなかった。



第82図 N区第1面出土釘

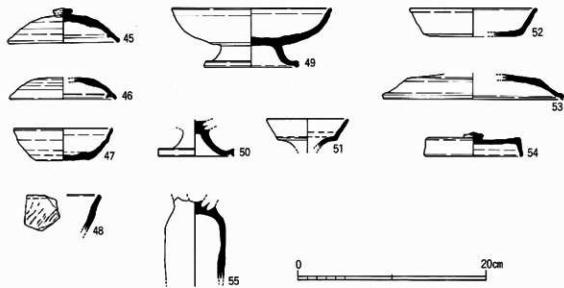


第83図 N区第1面出土土器

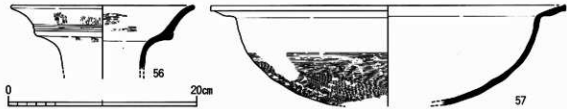


第84図 IV区第1面出土土瓦

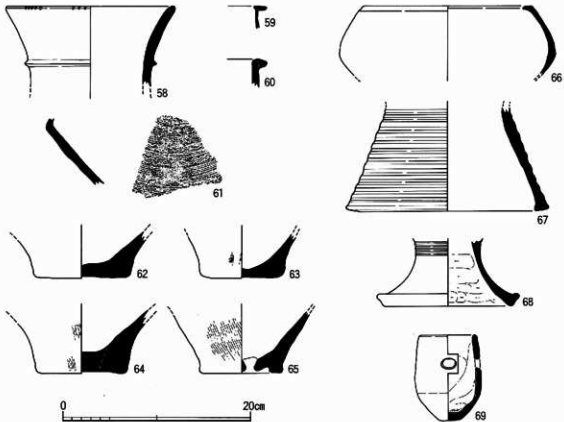
第2面 土壌層Iを掘削し、土壌化の及んでいない5層ないし6層上面で検出した。当遺構面ではかなりの密度で遺構を検出しており、遺構相互の切り合い関係も複雑である。この状況を反映し、遺構の時期も、弥生時代前期～中期初頭・弥生時代中期後半・奈良時代と多岐にわたる。当遺構面を検出する際に出土した土器（第85図～第87図）も、弥生時代中期・後期と奈良時代の土器が認められることから、上記の年代観と一致するものである。



第85図 IV区第2面出土土器(1)



第86図 IV区第2面出土土器(2)

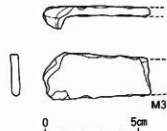


第87図 IV区第2面出土土器(3)

まず、弥生時代前期～中期初頭の遺構としては、溝・土坑を検出している。次に、弥生時代中期後半の遺構としては、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝・土坑などを検出している。最後に奈良時代の遺構としては、掘立柱建物跡と溝などを検出している。

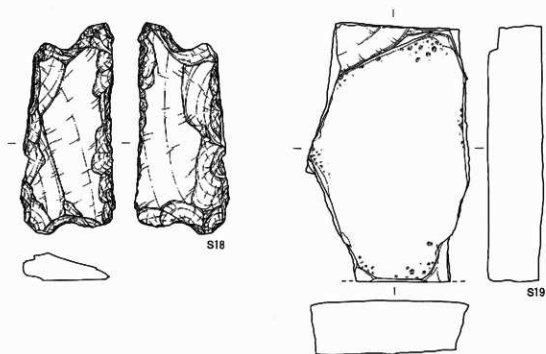
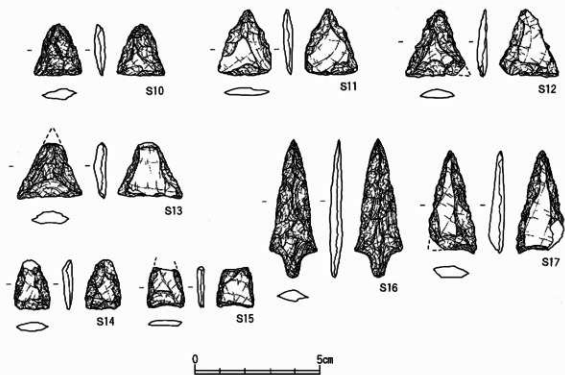
第3面 土壌層Ⅱを掘削し、その下層の8層上面で検出したものである。弥生時代前期の遺構に限られ、その数もわずかである。土坑と溝を検出している。

第4面 土壌層Ⅲの上面で検出している。水田跡を検出した。Ⅰ区からⅢ区の第4面で検出した水田跡に続くものである。



第88図 IV区第2面出土鉄製品

第5節 IV区の調査



第89図 IV区第2面出土石器

2. 第1面(1)の調査

(1) 概要 (図版61 写真図版48)

概要 第1面(1)で検出された遺構は、掘溝と溝のみである。調査区の西側と南東隅において遺構が比較的密に検出されたが、中央付近は掘溝すら検出されなかった。
この面で検出された遺構の時期は、鎌倉時代前半以降である。



第90図 IV区第1面(1)

(2) 調査の結果

鋤溝 (写真図版48)

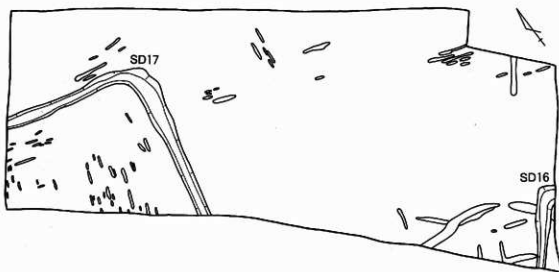
検出状況 I—III区とは異なり、調査区全域にわたっては検出されず、鋤形に屈曲するSD17の西側に集中している。その他、調査区の北東側数箇所で見出している。

形状・規模 北北東—南南西方向もしくはその直交方向にのびる直線的な溝で、N25°Eを指向する。直交する溝相互の切り合い関係は認められない。検出した長さは、短いもので数10cm、長いもので3.7mと、かなりのバリエーションが認められる。検出面における幅は15cm～30cmを測り、検出面からの深さは深いもので15cmである。

埋没状況 黄灰色砂泥じりシルト1層が堆積していた。

出土遺物 埋上内からは全く出土していない。

時期 他の地区で検出した鋤溝とはほぼ同時期の、中世後半以降と考えられる。



第91図 IV区第1面(1)

2. 第1面(2)の調査

(1) 概要 (図版62 写真図版49)

概要 第1面(2)で検出された遺構は、掘立柱建物跡4棟、土坑5基、墓1基、井戸1基、溝11条、竈4面が検出された。

溝・竈の方向についてはおよそN10°~20°Eと、その直交する方向を指向しており、全体的に規則的に配置されている。

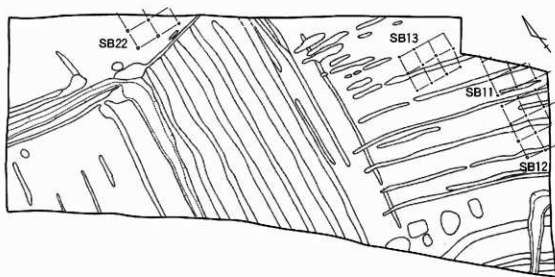
調査区全体にわたって遺構が検出されたが、北西隅については遺構は認められない。



第92図 IV区第1面(2)

(2) 調査の結果

I. 掘立柱建物跡



第93図 IV区第1面(2) 掘立柱建物跡

SB11 (図版63 写真図版60)

検出状況 調査区北東隅で検出した(第93図)。平面的には畝1と一致するが、その前後関係は明確にできない。

形状・規模 N20°Eに棟軸方向をとる。梁行2間、桁行2間を検出したが、いずれも調査区外までのびる可能性があるため、建物の規模を特定できない。検出した範囲で、梁行方向で4.16m、桁行方向で4.72mを測る。柱穴間の平均距離は、梁行方向で2.08m、桁行方向で2.36mである。

柱穴 掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方の径16~27cm、柱直径10~20cm、検出面からの深さ10~35cmを測る。

出土遺物 柱穴内より、須恵器・土師器・黒色土器が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。いずれも器種は椀で、黒色土器はB類に分類されるものである。

時期 柱穴から出土した土器から、10世紀~11世紀を中心とした時期と考えられる。

SB12 (図版63 写真図版60)

検出状況 当調査区の東隅で検出した(第93図)。SB11同様、畝1と平面的に一致するが、その前後関係は明確にできない。

形状・規模 N15°Eに棟軸方向をとる。梁行3間、桁行3間の掘立柱建物跡である。当建物の南東部は当地区とⅢ区の間排水溝内にあたり、未検出である。ただし、北側桁行方向について、柱穴間の距離から判断して当建物の桁行が4間と仮定すると、該当する柱穴はⅢ区で検出されるべきである。しかし、Ⅲ区においては該当する柱穴は検出されなかった。したがって、当建物が3間×3間の建物であることは確実である。

西梁行方向で5.80m、北桁行方向で6.30mを測り、建物の面積は36.5㎡と復元される。

柱穴間の平均距離は西梁行方向で1.93m、北桁行方向で2.10mである。

- 柱 穴** 掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方の径24~26cm、柱痕径13~15cm、検出面からの深さ18~26cmを測る。
- 出土遺物** 須恵器と土師器が出土しているが、いずれも小片のため器種の特定も困難である。
- 時 期** 出土土器からは時期の特定はできない。しかし、SB11とその棟軸方向がほぼ一致することから、SB11と同様な時期、つまり10世紀~11世紀にかけての時期と考えられる。

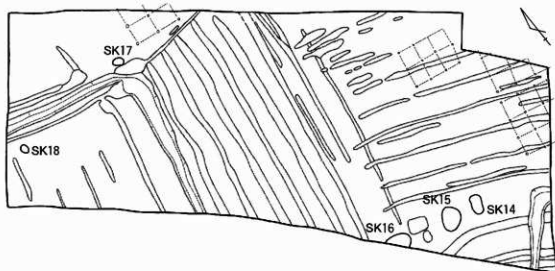
SB13 (図版64 写真図版60)

- 検出状況** 調査区の北東隅で検出した(第93図)。当建物についても出1と平面的に重複するが、その前後関係は明確にできない。
- 形状・規模** N10°Eに棟軸方向をとる、梁行2間、桁行3間の掘立柱建物跡である。北桁行方向の東側2穴については検出できなかった。西梁行方向で4.25m、南桁行方向で5.65mを測り、建物の面積は24.0㎡と復元される。西梁行方向における柱穴間の平均距離は2.12m、南梁行方向における柱穴間の平均距離は1.88mである。
- 柱 穴** 掘り方の平面形は円形を呈する。掘り方の径16~22cm、柱痕径10~16cm、検出面からの深さ3~32cmを測る。
- 出土遺物** 須恵器と土師器が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。須恵器・土師器ともに碗と甕が出土している。
- 時 期** 時期を特定できるような土器は出土していないが、須恵器の碗および土師器の甕から判断して、10~11世紀を中心とした時期と考えられる。

SB22 (図版64 写真図版60)

- 検出状況** 調査区の北側で検出した(第93図)。SD35の東側に位置するが、当建物と切り合い関係にある遺構は認められない。
- 形状・規模** 当建物の大半は調査区外まで広がるものと考えられ、検出できたのは梁行方向で1間+ α 、桁行方向で2間+ α である。梁行方向における柱穴間距離は2.14m、桁行方向における2間分の距離は5.44mで、その柱穴間の平均距離は2.72mである。
- 棟軸方向はN9°Eを指向する。
- 柱 穴** 掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方の径24~30cm、柱痕径15~17cm、検出面からの深さ32cmを測る。
- 出土遺物** 須恵器と土師器が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。須恵器は甕の体部片が、土師器は坏と碗が出土している。土師器の碗は、底部を回転糸切りにより切り離すものである。
- 時 期** 出土土器から判断して、11世紀を中心とした時期と考えられる。

II. 土 坑



第94図 IV区第1面(2) 土坑

SK14

- 検出状況** SK15の東側に位置する(第94図)。完存する。他の遺構との切り合い関係はない。
- 形状・規模** 平面形は隅丸長方形で、長軸方向で2.16m、その直交方向で1.24mを測る。長軸はN20°Eを指向する。
- 埋没状況** 暗褐色シルト泥じり砂1層からなり、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 土器は、須恵器の甕の胴部片と器種不明の小片が出土したのみである。他にサヌカイトの剝片が2.9g出土している。
- 時期** 出土土器から、平安時代以降と考えられる。

SK15 (図版65 写真図版50)

- 検出状況** SK14とSE01の間に位置する(第94図)。完存する。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 平面形は不整形で、長軸方向が2.58m、その直交方向で2.20mを測る。長軸はN5°Eを指向する。
- 埋没状況** 暗灰褐色シルトと黄灰色砂の互層からなる。自然堆積によるものと考えられる。
- 出土遺物** 須恵器の椀が出土している。口縁部片(507)と底部片(508)が各1点ずつ出土しているが、基本的には同タイプのものと考えられる。
- 時期** 出土土器から判断して、11世紀後半と考えられる。

SK16 (図版65 写真図版50)

- 検出状況** SE01の西側に位置する(第94図)。南西側のほぼ半分が削平されている。明確に切り合い関係にある遺構は認められない。
- 形状・規模** 検出できた部分での平面形は楕円形であるが、規模は不明である。

- 埋没状況** 上から暗灰褐色砂混じりシルト、暗青灰色シルト混じり砂が堆積している。特に上層については、人為的に埋められた層である。
- 出土遺物** 須恵器の碗(509・510)と小皿(511)が出土している。碗は、口縁部片と底部片とが出土しているが、基本的に同タイプに分類されるものと考えられる。
- 時期** 出土土器から判断して、11世紀後半と考えられる。

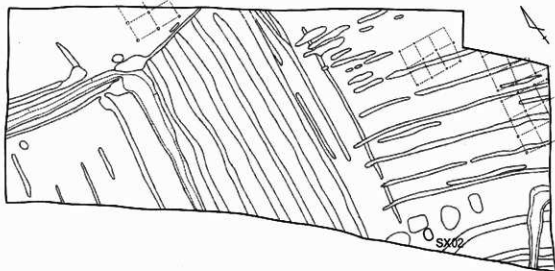
SK17

- 検出状況** SD39の北側に位置する(第94図)。完全に検出された。切り合い関係にある遺構は認められない。
- 形状・規模** 平面形は楕円形で、長軸方向で1.22m、その直交方向で84cmを測る。長軸はN60°Wを指向する。
- 埋没状況** 暗灰褐色砂質シルト1層からなる。
- 出土遺物** 遺物は出土していない。
- 時期** 遺物が出土していないため明確にできない。

SK18

- 検出状況** SD43の北東側に位置する(第94図)。完全に検出された。切り合い関係にある遺構は認められない。
- 形状・規模** 平面形は円形で、長軸方向で90cm、その直交方向で74cmを測る。長軸はN32°Wを指向する。
- 埋没状況** 暗灰褐色砂質シルト1層からなる。
- 出土遺物** 遺物は出土していない。
- 時期** 遺物は出土していないが、埋土の特徴から平安時代以降と考えられる。

Ⅲ. 墓

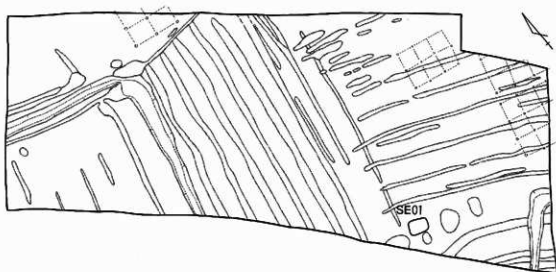


第95図 IV区第1箇(2) 墓

SX02 (図版65 写真図版57・129)

- 検出状況** 調査区南部で検出した木棺墓である(第95図)。SE01の南側に接して位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 掘り方** 平面形は長方形を呈し、主軸方向はN5°Wを指向する。主軸方向で1.20mを測り、その直交方向で84cmを測る。掘り方内中央部における検出面からの深さは、わずか8cmである。
- 棺** 棺材自体は遺存していなかったが、棺材部分が幅約2cmのシルトの帯となっていた。このシルトから、棺の規模は、主軸方向で1.08m、その直交方向で49cmと復元される。なお、底板についてはその痕跡も確認することはできなかった。
- また、棺内の北東隅から副葬されたと考えられる土器(512)が完形に近い状態で、棺底に近いレベルで出土している。このことから、北側が頭位であったものと推定される。
- 埋土** 棺内には暗灰色極細砂1層が、掘り方内にも灰色シルト質極細砂1層が堆積していた。
- 出土遺物** 棺内から土師器の坏(512)1点が出土している。形態的には大皿に近いが、底部が回転糸切りにより切り離されていること、全体的に薄く仕上げられていることから、坏と判断した。
- 時期** 棺内より出土した土器から判断して、11世紀後半と考えられる。

IV. 井戸



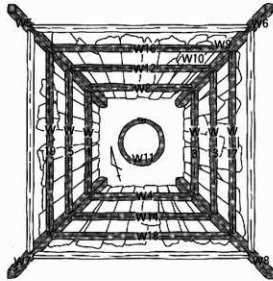
第96図 IV区第1面(2) 井戸

SE01 (図版66~70 写真図版52~56・129)

- 検出状況** SK15とSK16の間に位置するが、それぞれ関連する遺構であったかどうかは不明である。上部は削平されている可能性があるが、平面的には完全に検出できた。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 掘り方の平面形は長方形で、長軸方向で2.34m、その直交方向で1.60mを測る。
- 掘り方** 縦断面は全体的に見ると逆台形を呈しているが、東側の壁の底付近は段があり不整形で

あるのに対し、西側の壁は上部以外はほぼ垂直に掘られている。最深部における検出面からの深さは2.47mを測る。長軸はN69°Wを指向する。掘り方は礫層をさらに若干掘り込んでおり、この層からの湧水を利用したものと考えられる。

掘り方の裏込めは、大きく3層に分けることができる。最下層は明るい灰色を中心とするシルト、最上層は褐色からやや暗い灰色を中心とする極細砂、その間の層は両方の層が混在した層である。いずれの層も外側から内側にかけて緩い傾斜をもって埋められている。



第97図 主要井戸材の位置

井戸

井戸は木組みで、縦板組隅柱横棧どめである。横棧は確認できた数は4段であるが、高さから本来は5段〜6段ほどあった可能性がある。掘り方の西側に寄せて設置されており、掘り方上端部の広がっている部分以外は掘り方の西側壁に接して組まれている。

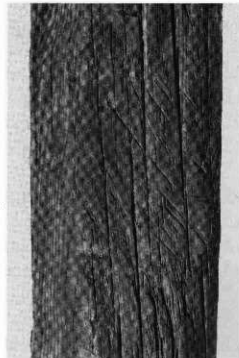
井戸内の平面形はほぼ正方形を呈し、検出された上部での規模が縦横ともほぼ98cm、深さは掘り方の底と同じで検出面から2.47mを測る。底での規模は縦横ともほぼ76cmを測り、若干上方が闊くようにして築かれている。井戸底の標高は4.34mである。

隅柱

隅柱にそれぞれ1本の角材を使用している(W5~W8)。その内、西南側の隅柱の下には石が置かれ、隅柱の安定が計られている。

隅柱には、それぞれ側面の内、2面に横棧を入れるほぞ穴を開けている。確認できたほぞ穴は4段であるが、高さが本来の形状を示していないため不明であり、本来はそれ以上あった可能性がある。ほぞ穴はいずれも裏側まで貫通していないが、ほぞ穴同士でつながっているものもある。断面形は基本的には長方形を呈しているが、W7・W8は断面が不整形である。これは、後に記すように再利用されたものであることに起因するものであろう。それぞれの大きさは第12表の通りである。

現存する最大の長さはW7で213.9cm、断面はW8で14.6cm×13.0cmである。ほぞ穴とほぞ穴の間は39cmで、最下部から第1段目のほぞ穴までの高さは29cmを測る。



第98図 隅柱調整直 (W8)

第12表 隅柱計測表 (cm)

No.	現存長	最大幅	最大厚	断面形	ほぞ穴			樹種	備考
					長さ	幅	深さ		
W5	183.2	12.6	5.0	長方形	7.0	3.0	3.6	ヒノキ	
W6	189.9	11.6	6.4	長方形	8.0	4.0	2.4	ヒノキ	再利用。
W7	213.9	14.6	10.4	不整形	7.0	3.4	2.4	コウヤマキ	釘M5。再利用
W8	191.0	14.6	13.0	不整形	7.2	3.0	3.0	コウヤマキ	釘M6。再利用

表面の調整は幅4cmほどのハツリ痕が認められるほか、横方向あるいは斜め方向の細い線状の傷が認められ、これについても調整に伴う痕跡と考えられる。この細い線状の傷はハツリ痕と同じ場所にも認められ、かつ調整単位がハツリ痕とは異なることから、それぞれ異なる調整が同じ場所において行われていたものと考えられる。

また、W6～W8には、井戸として使用するのに不必要なほぞ穴や鉄釘が認められる。W6の最下段には貫通しない方形のほぞ穴が1箇所、W7にはほぞ穴が3箇所、鉄釘が1箇所、W8にもほぞ穴が3箇所、鉄釘が1箇所、認められる。これらの存在から、これらの隅柱は転用されたものと考えられる。

横 棧 合計16本が出土している。最下段から出土したものがもっとも遺存状況がよく、上方は遺存状況が悪くなる。基本的な形態は、長さが77cm程度、幅が6cm程度、厚さが3.5cm程度で、断面形が長方形を呈する。両端は、ほぞ穴にはめ込むためのケズリが4側面から行われて細くなっているが、W4の上端のように加工されていないものもあり、材によってはケズリが行われていない部分もある。

個々の計測値は第13表のとおりである。

W1は中央部に緩い稜線をもつ。上側の端面は直線的で平滑に仕上げられているが、下

第13表 横棧計測表 (cm)

No.	長さ	最大幅	最大厚	断面形	樹種	備考
W1	78.6	5.4	3.3	長方形	ヒノキ	焼け痕、クサビ痕が認められる。
W2	74.3	7.5	3.6	台形	ヒノキ	
W3	77.9	6.0	3.2	長方形	ヒノキ	焼け痕が認められる。
W4	77.5	5.1	3.5	長方形	ヒノキ	クサビ痕が認められる。
W12	79.0	4.8	4.0	長方形	ヒノキ	
W13	85.0	5.0	4.5	長方形	ヒノキ	
W14	80.0	6.0	4.5	長方形	ヒノキ	
W15	82.0	7.5	4.5	長方形	ヒノキ	
W16	84.0	5.5	4.5	長方形	ヒノキ	
W17	88.0	5.5	5.5	長方形	ヒノキ	
W18	88.0	6.5	3.5	長方形	ヒノキ	
W19	84.0	6.0	4.0	長方形	ヒノキ	

側の端面は凹凸が多く、不揃いである。調整痕はほぞにはめ込むために切り込まれた部分でのみ確認でき、幅は6cm以上である。やや上方の側面には、幅1.5cmのクサビ状のものを打ち込んだと思われる痕跡が確認できる。裏側には焦げた痕跡が認められる。

W2は中央部で明瞭な稜をもち、断面の形状は台形を呈している。斜めになっている面は、木目の方向とも合致しており、辺材の可能性はある。

W3は上側の端面に凹凸があり、下側の端面は平滑に仕上げられている。下端は4方向から削られているが、上端は1側面を除く3方向から削られている。裏側には焦げた痕跡が認められる。

W4は両側の端面とも平滑に仕上げられている。下端は両側面の2方向から削られているのに対し、上端は削られていない。上方の側面にはクサビ状の痕跡が認められる。

実測していない横棧の大きさは井戸の上方にあるものほど長く厚みがある。これは、井戸が下方から上方へ広がっていることと合致している。

接合関係

実測した横棧は全て接合関係にあり、幅の狭い側面を接するようにしてW2・W1・W3・W4の順で接合できる(写真図版55)。表面にはゆるやかな弧を描く痕跡が認められるが、それは個体ごとに独立せず、全てつながっていることがわかる。すなわち、この痕跡は各個体に分割される前の板状になっている時から存在するものと考えられる。また、W1とW3の裏側に認められた焦げあととは接合すると同じ位置にあり、分割される前から焦げていたことがわかる。その原因、理由については明らかでない。接合時における各個体の長さ異なるのは、分割後に長さを調節したためと考えられる。

実測していない横棧は2点(第97図のW12とW13)のみ接合することができたが、実測した4点との接合はできなかった。他の横棧については運存状況が悪いため接合関係にあるかどうかは明らかにならなかった。

製作方法

以上の観察結果から横棧の製作方法を復元すると、原木から板材を製作する第1段階、板材を分割する第2段階、井戸枠を構築する際に調整を行う第3段階の3段階に分けることができる。

第1段階は、原木から板材を製作する段階で、木取りは板目取りである。板材は少なくとも長さ78.6cm、幅24cm、厚さ3.6cmはあったと考えられる。この板材は原木の端付近も含んでおり、W2の歪んだ断面形はそれを示している。この板材の段階で、W1・W3に認められる焦げ痕が付き、ゆるやかな円弧状の痕跡(調整痕か?)が付けられたものと考えられる。

第2段階は、板材を縦方向に分割する段階である。分割にあたっては側面にクサビ状の痕跡が認められ、それらが同じ位置で接合できることから、クサビによって分割されたものと考えられる。板材からすぐにクサビを打ち込み分割したのか、その前に縦方向にある程度割れ目を入れてからクサビを打ち込んだのかは、各部材の端面が削られているために不明である。

第3段階は、井戸枠を構築する際に調節する段階である。この調節には、各部材の長さ、ほぞ穴とのかみ合わせなどがあり、横棧の端が切られたり、削られたりしている。

以上の3段階を経て、横棧として井戸の一部を構成している。また、各段階が行われた

第14表 縦板計測表 (cm)

No.	現存長	最大幅	最大厚	断面形	樹種	備考
W9	152.9	9.8	1.0	長方形	ヒノキ	
W10	137.2	10.5	1.0	長方形	ヒノキ	

場所であるが、作業の効率から考えて第1段階から第2段階は他の場所(部材の製作所)で行われたものと思われる。最後の第3段階は、各部材の長さが異なることから井戸を組む現地で行われたものと思われる。ただし、接合できた4点(W1-W4)と2点(W12・W13)の2組は、それぞれ井戸の中で同じ段の横桟として使用されていることから、井戸を作る現地まで分割した板材を一組にして運んだか、あるいは板材のまま現地まで運び、第2段階の作業も現地で行った可能性もある。

縦板 合計76点出土しており、もっとも遺存状況の良い2点のみ実測した。横桟の裏側に縦方向に差し込まれている。井戸が上方に向かって広がっているのに対し、縦板は幅が1個体の中で等しいため、井戸の下方では多くの縦板が重なっていた。縦板の中には斜めに傾いて出土したものもある。

いずれの縦板も上方がやせており、本来の長さは不明である。また、いずれも調整痕が残っており、表面にも木目に沿った凹凸が認められることから、調整は行わず、裂くようにして板を製作したものと考えられる。

実測した縦板の計測値は第14表のとおりである。

水溜 円形の曲物を転用した水溜である。底板は外されて存在しないが、それを留めていた木釘穴が15箇所認められ、その内の2か所には木釘が遺存していた。よってこの曲物は釘結合曲物であることがわかる。

なお、出土した状態は曲物の底を上に向けていたので、固化はそれに合わせて行った。ただし、ここでの記載は曲物としての表現を行うこととする。

側板の直径は長軸で39.4cm、短軸で39.0cm、高さ27.8cm、厚さ0.6cmを測り、蓋は上段で幅6.1cm、下段で幅4.3cmを測り、厚さは0.4cmを測る。

側板は長さ約126cm、厚さ0.6cmの薄い板材を曲げて製作されている。内面には縦方向のケビキが認められるが、部分的にやや斜め方向のケビキも認められ一部は斜格子となっている。この板は約7cmほどの重なりをもって曲げられて、幅約1.4cmの棒皮紐で縦じまわされている。

側板の棒皮紐の縦じまわせ方法は、1列に8段の縦じまわせで、上縁が外側縦じ、下縁が内側縦じであるので、「1列上下内8段縦じ」である。棒皮紐を側板に通すところには切目が入れているが、その部分には端から約1cmのところ縦方向の線刻が認められ、切目を入れるとき、棒皮紐を通すときの基準線である可能性もある。

側板の重なった部分で互いに接する面には長さ1-2cm程度の長粒状の傷が認められ、工具痕の可能性もある。同様の傷は下段蓋の内面にも一部認められる。

蓋は上下2段あり、上段の方が遺存状態が良い。上段の縦じまわせの方法は、2箇所に通孔が認められ、外側から見ると3段になっている。下段については破損しているため不

明であるが、遺存している部分から同じ掘じ方であると思われる。

埋没状況 井戸の中は土層断面を残して掘削することができなかった
ので、断面図を作成することは不可能であった。ただし、掘
削していく途中で平面的に土層を観察したので、その概略に
ついて記す。

井戸枠内の土層は第99図のようにおおよそ堆積していたが、
最上層以外はいずれもグライ化していた。土層は全部で5層
からなる。

遺物出土状況 完形の須恵器碗（513）が井戸底の水溜の中から口縁部を
上にして出土した。それ以外は、井戸枠内の埋土の中から須
恵器、土師器の破片が出土している。

出土遺物 土器と鉄製品が出土している。

土器 須恵器と土師器が出土している。

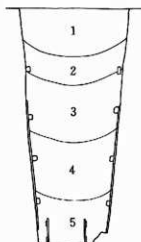
須恵器は、碗（513～516）と捏鉢（517）が出土している。
碗は、完存する513に代表されるように、底部がわずかに平
高台をなすタイプである。捏鉢は、実際に使用されていたも
ので、内面は平滑になっている。

土師器は、底部片が2点（518・519）出土している。いずれも托の底部と考えられる。

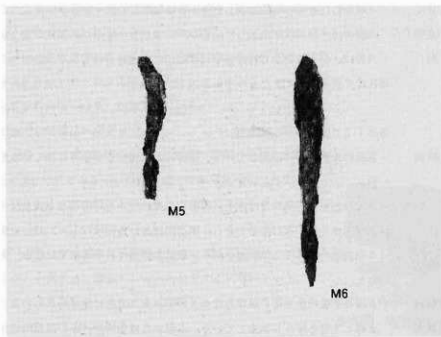
鉄製品

釘が2点（M5・M6）隅柱に打ち込まれていた（第100図）。いずれも断面方形を呈す
る角釘である。M5は、全長6cmを測り、断面は8×6mmと長方形をなす。頭部はわずかに
引き延ばされている。M6は、先端部を欠くもので、3.6cm残存する。断面は7×4mm
と長方形をなす。頭部は、M5同様、わずかに引き延ばされている。

時期 出土土器、特に須恵器碗の形態から判断して11世紀後半と考えられる。

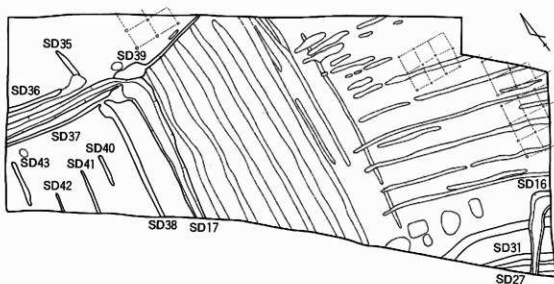


1. 茶褐色 極細砂
 2. 灰色 シルト質極細砂
 3. 灰色 極細砂
 4. 灰色 極細砂混じりシルト
 5. 灰色 シルト
- 第99図 井戸内土層模式図



第100図 出土鉄釘

V. 溝



第101図 IV区第1面(2) 溝

SD16 (図版39 写真図版31)

検出状況 IV区の南部で検出された(第101図)。平面的には、調査直前まで機能していた用水路と重複する溝である。SD27・SD31と切り合い関係にあり、両溝を切っている。

形状・規模 III区から当地区へ入った直後、当溝はほぼ直角に屈曲し、北東-南西方向にはほぼ直線的にのびる。南西端は調査区外までのびている。当地区において検出した長さは9.40mである。横断面は緩やかな逆台形を呈し、検出面における幅は78cm~2.22mを測る。最深部における検出面からの深さは54cmを測る。底部の標高は、南西端で6.36m、東端で6.15mを測る。

埋没状況 大きく2層からなる。

出土状況 上層からは近世の陶磁器が、下層からは須恵器の椀・控鉢が出土している。

出土遺物 近世陶磁・須恵器が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

時期 当溝は、出土遺物から判断して12世紀代には掘削されており、幾度かの掘削を繰り返し、現代まで使用されてきたものである。

SD17 (図版70 写真図版51)

検出状況 IV区の西隅付近に位置している(第101図)。現在まで使用されている用水路に重複している。

形状・規模 南北から東西方向にはほぼ直角に屈曲して流れている。両端とも調査区外に続いている。横断面はゆるやかなU字形をなし、検出面における幅は72cm~2.62mを測る。最深部における検出面からの深さは30cmを測る。底部の標高は、西端部で6.49m、南端部で6.29mを測る。

埋没状況 上層と下層の大きく2層からなり、いずれも人為的に埋められている。

出土状況 上層と下層各層から出土している。上層からは染め付け等の近世陶磁器が出土し、下層からは須恵器が出土している。

出土遺物 近世陶磁器と須恵器が出土している。近世陶磁器は、染め付け・くらわんか碗などが出土しているが、小片のため図化できなかつた。須恵器では、椀・捏鉢などが出土しているが、椀の底部片(520)をわずかに図化できたにすぎない。

時期 上層と下層とは時期が大きく異なる。上層は近世に、下層は11世紀後半から12世紀前半に位置付けられる。また、当溝は調査直前まで用水路として機能していたことを考慮に入れると、当溝は11世紀後半に掘削されて以降、現代まで幾度かの再掘削を経て継続してきたものと考えられる。

SD 2 7 (図版70 写真図版51)

検出状況 IV区南東隅で検出された(第101図)。III区から続く溝である。北端はSD16に切られている。

形状・規模 溝の方向は西から南東である。長さは12.9mが確認された。幅は検出面で1.08m～86cm、溝底で72～50cmを測る。検出面からの深さは30cmである。溝底の標高は西端で6.34m、南東端で6.25mを測り、西方向から南東方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況 上から、暗オリーブ褐色細砂～極細砂、黒褐色極細砂、黒褐色シルト質極細砂の3層からなる。

出土遺物 完形に復元できる須恵器の椀2個体(522・523)が出土している。2個体とも同タイプに分類できるもので、底部はわずかに平高台の痕跡をとどめている。

時期 出土土器から判断して、12世紀前半と考えられる。

SD 3 6 (図版70)

検出状況 IV区西端で検出された(第101図)。SD17に平行し、その北側に位置する。西側は全体に底が深くなっている。

形状・規模 溝の方向は北西から南東である。長さは9.76mが検出された。幅は検出面で1.62m～72cm、底部で1.34m～72cmを測る。検出面からの深さは9cmである。溝底の標高は北西端で6.91m、南東端で6.87mを測り、北西方向から南東方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況 暗灰色砂混じりシルト1層からなる。

遺物出土状況 上層から鈔帯(M7)が出土している。

出土遺物 土器と金属製品が出土している。

土器 須恵器(521)が出土している。坏Bの底部である。推定高台径8.2cmとやや小さく、口縁部はやや直立気味に立ち上がるタイプである。高台の直上にヘラミガキらしきものがみとめられる。

金属製品 鈔(巡方)が1点(M7)出土している(第102図)。一部を欠くが、平面形は2.35cm×2.60cmとわずかに長方形をなす。各コーナーは丸みを帯び、1ヶ所には径2mmの釘が打ち付けられている。厚さは7mmを測る。



第102図 SD36出土土器

時期 出土土器から判断して、奈良時代と考えられるが、詳しくは第7章第1節で検討する。

SD37 (図版70)

- 検出状況** IV区西側で検出された(第101図)。東側はSD38とT字形に合流し、最終的にSD17に合流している。西側はV区に続いている。SD17と平行し、他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 溝の方向はほぼ東西方向である。長さは12.6mが検出された。幅は検出面で48-36cm、溝底で14-28cmを測る。断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは6cmである。溝底の標高は西端で6.76m、東端で6.71mを測り、西方向から東方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況** 暗灰色極細砂1層からなる。
- 出土土器** 完彩に復元できる須恵器の碗1個体(524)が出土している。
- 時期** 出土土器から判断して11世紀後半と考えられる。

SD38 (図版70)

- 検出状況** IV区西側で検出された(第101図)。畝状遺構やSD17・SD40などの溝に平行し、北端は直交するSD37につながっている。
- 形状・規模** 溝の方向は南北方向である。長さは14.62mが検出された。幅は検出面で36cm、溝底で約16cmであるが、一部幅が広がっている箇所があり、そこでの幅は検出面で約1.36m、溝底で約1.09mである。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは15-20cmである。溝底の標高は南端で6.71m、北端で6.62mを測り、南から北へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況** 2層からなり、粒子からみて徐々に埋没していったものと思われる。
- 出土遺物** 須恵器と瓦片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。須恵器は甕の体部片と輪高台を有する坏の底部片が、瓦は丸瓦の一部が出土している。
- 時期** 出土した土器から判断して、奈良時代から平安時代にかけてと考えられる。ただし、SD37と一連の遺構と考えられることから、11世紀後半に位置付けたい。

SD39

- 検出状況** IV区西側で検出された(第101図)。西端はSD17に切られている。また、溝は畝状遺構の北端を切っている。
- 形状・規模** 溝の方向は畝状遺構と直交し、東西方向である。溝の西端は幅が広く楕円形の土坑状をなしている。溝の長さは8.34mが検出された。幅は検出面で18-36cm、溝底で8-20cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは5-13cmである。溝底の標高は西端で6.91m、東端で6.88mを測り、西方向から東方向へ流れていたものと思われる。
- また、西端の広がっている部分は、幅1.74m、深さ23cmを測り、溝とは段をもって接続している。
- 埋没状況** 灰白色極細砂の1層のみで、粒子からみて徐々に埋没していったものと思われる。
- 出土遺物** 須恵器の碗と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。碗は平高台を有する底部片が、甕は叩き目を有する体部片が出土している。
- 時期** 出土した土器から判断して、11世紀後半を中心とした時期と考えられる。

SD40 (図版70)

- 検出状況** IV区西側で検出された(第101図)。SD17によって方形に区画された中に位置し、SD38・SD41に平行する。いずれの遺構とも切り合い関係はない。
- 形状・規模** 溝の方向は南北方向である。長さは3.74mが検出された。幅は検出面で30~52cm、溝底で16~36cmを測る。断面は台形を呈し、検出面からの深さは3~5cmである。溝底の標高は南北とも6.77mであり、流れの方向は不明である。
- 埋没状況** 埋土は2層からなり、粒子からみて徐々に埋没していったものと思われる。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** SD17・SD38と平行することから、これらの遺構とはほぼ同じ11世紀と考えられる。

SD41

- 検出状況** IV区西側で検出された(第101図)。SD17によって方形に区画された中に位置し、SD40・SD42に平行する。南側は調査区外へ延びている。他の遺構との切り合いは認められない。
- 形状・規模** 溝の方向は北側から南側である。長さは5.38mが検出された。幅は検出面で14~32cm、溝底で5~19cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは5~10cmである。溝底の標高は北側、南側とも6.77mである。
- 埋没状況** 暗灰色砂混じりシルト1層からなり、粒子からみて徐々に埋没していったものと思われる。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** SD40と同様、11世紀後半と考えられる。

SD42

- 検出状況** IV区西側で検出された(第101図)。SD17によって方形に区画された中に位置し、SD41・SD43に平行する。南側は調査区外へ延びている。他の遺構との切り合いは認められない。
- 形状・規模** 溝の方向は北側から南側である。長さは2.46mが検出された。幅は検出面で14~20cm、溝底で2~10cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは3~5cmである。溝底の標高は北端で6.77m、南端で6.76mを測り、北方向から南方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況** 埋土は1層である。粒子からみて徐々に埋没していったものと思われる。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** SD40と同様、11世紀後半と考えられる。

SD43

- 検出状況** IV区西側で検出された(第101図)。SD17によって方形に区画された中に位置し、SD42に平行する。南側は調査区外へ延びている。他の遺構との切り合いは認められない。
- 形状・規模** 溝の方向は北側から南側である。長さは5.40mが検出された。幅は検出面で28~42cm、

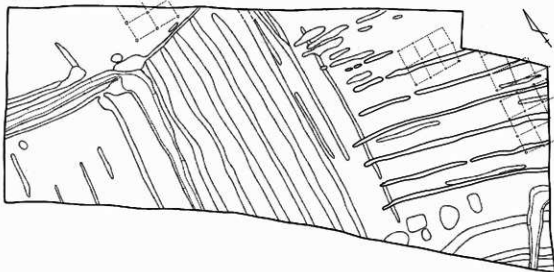
溝底で20～33cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは4～7cmである。溝底の標高は南端で6.76m、北端で6.74mを測り、南方向から北方向へ流れていたものと思われる。

- 埋没状況 埋土は1層のみで、粒子からみて徐々に埋没していったものと思われる。
- 出土遺物 全く出土していない。
- 時期 SD40と同様、11世紀後半と考えられる。

VI. 畠 (写真図版58)

概要 III区からIV区にかけて、平行する数条の溝状遺構を検出した。ほぼ等間隔であることから畠の畝立て跡と判断した。畠跡は南北方向の溝からなるものと、東西方向の溝からなるものとの2種が認められる。さらに同方向の溝のなかに間隔の異なる溝があることがわかり、それぞれ2枚の畠が重複しているものと判断した。結局、III区からIV区にかけて4枚の畠跡を検出したことになる。東側の畠から畠1・畠2・畠3・畠4と呼称することにする。

なお、一部の畠はIII区まで及ぶが、この分についても本項で報告することにする。



第103図 畠 1

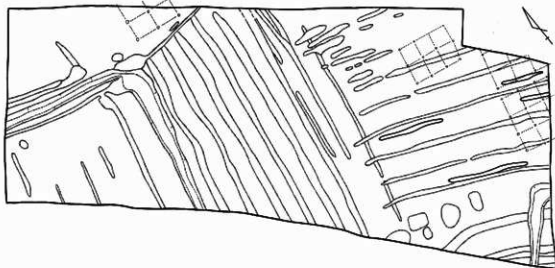
畠1 (図版43・44・71 写真図版58・129)

- 検出状況 当地区北東隅からIII区北隅にかけて検出した(第103図)。畠3・畠4の東側に位置し、畠3を切っている。また、畠2とは平面的に重複し、畠2に切られている。さらに、SB09～SB12とも平面的に重複するが、その前後関係は明らかにできない。
- 立地 III区から当地区にかけて、畠1の南側は南側へ向かって傾斜している。したがって、畠1は視覚的にも周囲より一段高くなっている。
- 形状・規模 7条の溝により6畝からなる。溝の方向はほぼ東西方向に近く、N65°Wを指向する。各溝の横断面は深い皿形もしくは逆台形を呈し、検出面における幅は40～80cmを測り、最深部における検出面からの深さは14cmである。
- 検出長 検出した長さはIII区からIV区にかけて検出した最長のもので39mを測り、最も北側の溝

- 面積** と最も南側の溝との距離は16.8mを測る。したがって、畝1の作付け面積は約655㎡と推定される。
- 溝底部の傾斜変換点を基準とした溝間の距離は2m～2.80mを測り、平均の溝間距離は2.60mである。検出面における畝幅は、1.60m～2.60mを測り、平均で2.40mである。
- 埋没状況** 各溝とも暗褐色シルト混じり灰色砂1層からなる。暗褐色シルトは土壌層Ⅰに対応する土壌層で、灰色砂中にブロック状に混入していたことから、人為的に埋められたものと考えられる。したがって、周囲の土壌層Ⅰを含む土砂を意図的に埋め、当畝を廃棄したものと考えられる。
- 出土遺物** 各溝内から比較的多くの遺物が出土しているが、小片のものが多く。これは、人為的に埋められたことに起因するものと考えられる。
- 須恵器・土師器・緑釉が出土しているが、図化できたのは、須恵器と土師器である。
- 須恵器** 椀・坏B・捏鉢・甕が出土しているが、図化できたのは椀（357～359）・坏B（360）・捏鉢（361）に限られる。甕は体部の小片が出土している。
- 土師器** 坏（525）と羽釜（362）が出土している。
- 時期** 溝内から出土した遺物は、周囲の土壌層Ⅰつまり遺物包含層を削り取り意図的に埋められた土に包含されていたものである。このため、溝内から出土した遺物の示す年代観にも大きな差異が認められる。そこで、出土遺物のなかで最も新しい年代観を示す土器が、畝が廃絶された年代により近い時期を示すものと考えられる。よって、上記の遺物のなかで最も新しいと考えられる須恵器の358もしくは361から判断して、12世紀中頃～後半にかけて廃棄されたものと考えられる。ただし、畝の開墾時期については明確にできない。

畝2（図版72 写真図版58・129）

- 検出状況** 当地区北東隅で検出した（第104図）。畝3・畝4の東側に位置し、畝1と平面的に重複し、畝1を切る。
- 立地** 畝1同様、当畝地の南側に比べて視覚的にも高くなっている。

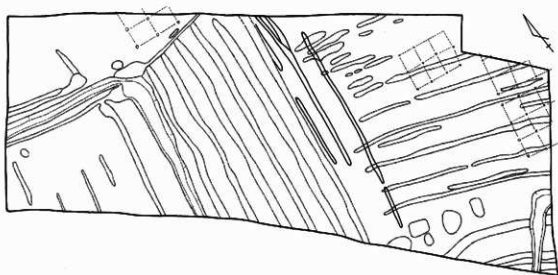


第104図 畝 2

- 形状・規模** 3条の溝からなる。北側の2条の溝と南側の溝とはかなり間隔があいているが、後述するように、この距離が北側の2条の溝の間隔（1畝）の約3倍、つまり3畝分であることから、同じ畝と判断した。よって、当畝は4畝からなるものと推定される。
- 溝** 溝の方向は、畝1とはほぼ同じで、N65°Wを指向する。溝の横断面はU字形を呈し、検出面における幅は50～65cmを測り、最深部における検出面からの深さは12cmである。
- 検出長** 最も長い溝で、Ⅲ区分を含めると12.7mを測る。さらに、この溝の西側延長上にも7.6mの溝がある。そこで、この途切れた部分も含めると延長28.3mになる。さらに、この溝はⅢ区の調査区外までのびていることから、当畝は少なくとも30mはあったことになる。
- 面積** また、当畝の幅は少なくとも9.7mあることから、検出した作付け面積は274.5m²となり、上記の推定部分を含めると、少なくとも約300m²はあったことになる。
- 畝** 溝底部の変換部を基準とした溝間の距離（畝間）は、北側の2条の溝間で2mを測る。検出面における畝幅は1.76mである。また、最も南側の溝とその北側の溝との距離は6.64mあり、少なくともこの間に3畝あったことが推定される。
- 埋没状況** 各溝とも暗褐色シルト混じり灰色砂1層からなる。この埋土は、畝1同様、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** わずかに土器片が出上しているが、いずれも小片のため図化はもちろんのこと、器種の特定も困難である。
- 時期** 出土土器から時期を判断することは困難である。畝1と畝3との前後関係から、畝1より新しく位置付けられる。

畝3（図版72 写真図版58）

- 検出状況** 当調査区中央部やや東側で検出した（第105図）。畝4の東側に位置し、一部の溝が畝4の溝に切られている。また畝1とも切り合い関係にあり、畝1にも切られている。
- 立地** 畝3は、畝1・畝2および畝4に囲まれており、畝1・畝2の南側および畝4の西側は明確に低くなっている。つまり、畝3も周囲より高い箇所立地するものといえる。

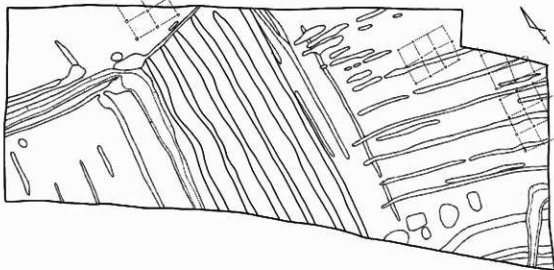


第105図 畝3

- 形状・規模** 3条の溝により2畝からなる。中央の溝の北端部で一部切り合い関係が認められる。ほぼ南北方向を示し、N10°Eを指向する。各溝の横断面は緩やかなU字形をなし、検出面における幅は30-55cmを測り、最深部における検出面からの深さは12cmである。
- 検出長** 最も東側の溝は、1箇所途切れているが、この箇所も含めると24.6mを測る。また、これと平行するその西側の溝はさらに北側の調査区外までのびている。したがって、東側の溝の北端からその西側の溝のより北側の部分の距離を加えると、少なくとも約30mはあったものと考えられる。
- 面積** 東側の溝と西側の溝との距離は4.6mを測る。したがって、この畝の作付け面積は少なくとも113㎡はあったものと推定される。
- 畝** 溝底部の変換部を基準とした溝間の距離（畝幅）は、西側と中央溝間で1.44m、中央溝と東側間で2.32mを測る。ちなみに、検出面における畝幅は1.12mと2mである。
- 埋没状況** 畝1・畝2同様、褐灰色シルト混じり灰色砂1層が堆積していた。褐灰色シルトは土壌層Ⅰそのものであり、周囲の上砂を人為的に埋めたものと考えられる。
- 出土遺物** 土器の小片は出土しているが、器種・時期等を特定できるものは出土していない。
- 時期** 時期を特定できる遺物が出土していないため、遺物からは時期を判断することはできない。ただし、畝1に切られていることから、畝1より古いことは明らかである。

畝4（図版73・74 写真図版58・59）

- 検出状況** 当調査区のはほぼ中央部で検出した。畝3の西側に位置し、畝3を切っている。また西側にはSD17がほぼ平行する。当畝の畝間溝の北端部はほぼ揃っており、これらの先端部を結ぶようにSD39が畝の主軸方向に直交するようにのびている。平面的にはこの溝と重なるが、その前後関係を明確にすることはできなかった。
- 立地** 畝4の西側に平行するSD17の肩は、東側と西側とでそのレベルが異なり、同溝の西側の方が明らかに一段低くなっている。よって、畝1～畝3でみてきたのと同様、畝4も周囲より一段高いところに作付けされたものと考えられる。



第106図 畝4

第5節 Ⅳ区の調査

- 形状・規模** 6条の溝より5畝からなる。ほぼ南北方向にのびる溝で、N9°Eを指向する。各溝の横断面は逆台形もしくは深い皿形を呈する。検出面における幅は、40cm～1.10mを測り、最奥部における検出面からの深さは25cmである。
- 検出長** 最も長い溝で28.1m検出している。ただし、いずれの溝も調査区外までのびているため、約30m以上はあるものと考えられる。
- 面積** 西側の溝と東側の溝との距離は13.4mあり、溝の長さが約30m以上とすると、少なくとも約400㎡はあったものと推定される。
- 畝** 溝底部の傾斜変換部を基準とした溝間の距離（畝幅）は1.84～2.16mを測り、平均で1.95mとなる。また、検出面における畝幅は1.28～1.60mを測る。
- 埋没状況** 他の畝と同じく褐灰色シルト混じり灰白砂1層からなる。褐灰色シルトは当遺構面のベースとなった土壌層Ⅰである。したがって、畝4についても、周囲の土砂をもって人為的に埋め戻したものと考えられる。
- 出土遺物** 須恵器・土師器・緑釉・黒色土器・瓦が出土している。このなかで図化できたのは、須恵器と緑釉に限られる。
- 須恵器** 椀・坏A・坏B・壺・甕・壺・控鉢の各器種が出土している。このなかで図化できたのは、椀（526・527）・坏B（528）・壺（529）・控鉢（530・531）である。ただし、528については、高台径に比べて高台・底部ともに厚いことから、他の器種に分類される可能性も考えられる。
- 土師器** 鍋の体部片が出土している。
- 緑釉** 図化できたのは532の1個体分であるが、他に小片が何点か出土している。532も含めて、いずれも椀の口縁部片である。532は須恵質で、底部は回転ヘラ切りによる切り離し後、輪高台を貼り付けている。
- 瓦** 533は玉縁のつく丸瓦の小片である。側面はヘラケズリ後ナデており、凹面側を面取りしている。凹面は布目の上をナデている。両面とも灰白色で、軟質である。
- 時期** 畝4に伴う土器についても、それぞれの示す年代観に明確な差が認められる。したがって、上記の出土遺物のなかで最も新しい年代観を示すもの、つまり526・527の須恵器椀から、12世紀中頃には廃棄されたものと考えられる。